

四 箇 船 石 1

—東入部地内道路2・3発掘調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第422集

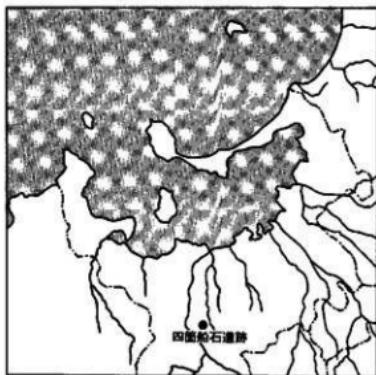
1 9 9 5

福岡市教育委員会

四 箇 船 石 1

—東入部地内道路 2・3 発掘調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第422集



福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には、豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは、現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存に努めているところであります。

今回調査が行われました、四箇古川遺跡・四箇船石遺跡は弥生時代を中心とした著名な遺跡で、今回の調査でも住居跡から土器と共に鉄器が出土しています。鉄器は当時の社会の中では非常に貴重なものであり、当時の生活を知る重要な遺物です。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対しまして、心から謝意を表します。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花 剛

例　言

- 1、本書は福岡市早良区東入部～西入部線道路改良工事にともない、福岡市教育委員会が平成2年度、平成3年度、平成5年度に発掘調査を実施した四箇古川遺跡1次、四箇船石遺跡4次、6次の調査報告書である。
- 2、本書使用の遺構実測図や遺物実測図、写真などの担当は調査ごとに異なるので、それぞれの報告を参考とされたい。
- 3、本書使用の方位は磁北である。
- 4、遺構の表記はSCは住居跡、SDは溝、SBは掘立柱建物、SKは土壙・土坑を示す。
- 5、本書の編集は井沢洋一・長家伸、常松幹雄の協議のもと、吉留秀敏がおこなった。
- 6、本書に関わる図面、写真、遺物などの資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

調査番号	9048			遺跡略号	SHF-1
地番	早良区大字重留ケジョ2042-1～字カイコ2051			分布地図番号	重留84
開発面積	1,498m ²	調査対象面積	1,100m ²	調査面積	1,100m ²
調査期間	1990(平成2)年5月1日～6月15日			調査担当	井沢洋一・長家伸

調査番号	9133			遺跡略号	SHF-4
地番	早良区大字四箇船石地内			分布地図番号	入部85
開発面積	800m ²	調査対象面積	400m ²	調査面積	350m ²
調査期間	1991(平成2)年10月23日～12月28日			調査担当	吉留秀敏

調査番号	9350			遺跡略号	SHF-6
地番	早良区大字東入部1905-1他			分布地図番号	入部85
開発面積	1,100m ²	調査対象面積	800m ²	調査面積	702.5m ²
調査期間	1993(平成4)年11月01日～12月08日			調査担当	常松幹雄　梵雲　調査後破壊

本文目次

第1章 調査に至る経過.....	1
第2章 調査の経過と組織.....	2
第3章 遺跡の位置と地理的環境.....	3
第4章 調査の記録.....	5
1、四箇古川遺跡第1次調査.....	5
2、四箇船石遺跡第4次調査.....	7
3、四箇船石遺跡第6次調査.....	25
4、（参考資料）浦江B遺跡第1次調査.....	34
第5章 まとめ.....	37

挿図目次

図1. 四箇船石遺跡の位置 (1/50,000)	1
図2. 調査地点配置図 (1/4,000)	4
図3. 調査区全景（南から）	6
図4. 河川路上層状態	6
図5. 調査区全体図 (1/200)	7
図6. SC06遺構図 (1/40)	9
図7. SC07遺構図 (1/40)	9
図8. SC08遺構図 (1/40)	10
図9. SC09遺構図 (1/40)	10
図10. SC10遺構図 (1/40)	11
図11. SC11遺構図 (1/40)	11
図12. SC12遺構図 (1/40)	12
図13. SC13・14遺構図 (1/40)	12
図14. 住居跡出土遺物1 (1/4, 1/2, 1/2)	13
図15. 住居跡出土遺物2 (1/4, 2/3)	14
図16. SK03遺構図 (1/30)	15
図17. SK04遺構図 (1/30)	15
図18. SK05遺構図 (1/30)	15
図19. 土壙出土遺物 (1/4, 1/2, 2/3)	16
図20. 溝出土遺物 (1/2, 2/3)	16
図21. SD02遺構図 (1/20)	17
図22. SD18遺構図 (1/20)	17
図23. SD02出土遺物 (1/4)	18
図24. SD18出土遺物 (1/4)	19
図25. 柱穴出土遺物1 (1/4, 2/3)	20
図26. 柱穴出土遺物2 (1/2)	21
図27. 包含層出土遺物1 (2/3, 1/2)	21
図28. 包含層出土遺物2 (1/4)	22
図29. 包含層出土遺物3 (1/4)	23
図30. 包含層出土遺物4 (1/4)	24
図31. 四箇船石遺跡6次調査区位置図	26
図32. 遺構の配置1 (1/80)	28
図33. 遺構の配置2 (1/80)	29
図34. 捨立柱建物実測図 (1/60)	30
図35. 住居跡実測図 (1/60)	31
図36. 住居跡・土杭実測図 (1/60, 1/40)	32

図37. 出土遺物実測図 (1/3) :.....	33
図38. 調査地点の位置 (1/10,000)	34
図39. 調査地点配置図 (1/500)	35
図40. SC01遺構図 (1/40)	36
図41. SC01出土遺物 (1/4)	36
図42. 四箇船石遺跡弥生時代主要遺構配置図 (1/1,500)	38

表目次

表 1. 四箇船石遺跡 4 次調査区出土剥片石器.....	37
-------------------------------	----

図版目次

PL 1. 四箇船石 4 次調査区近景 (西から)	
PL 2. 四箇船石 4 次調査区全景 (西から)	
PL 3. 1. 1 ~ 4 区遺構全景 (東から) 2. 4 ~ 7 区遺構全景 (東から)	
PL 4. 1. SK03土層断面 (北から) 2. SK04土層断面 (北から)	
PL 5. 1. SK05土層断面 2. SK03完掘状況 (東から)	
PL 6. 1. SK05完掘状況 (東から) 2. SC06土層断面 (北から)	
PL 7. 1. SC06完掘状況 (西から) 2. SC08完掘状況 (西から)	
PL 8. 1. SC08完掘状況 (北から) 2. SC09~SC12調査状況 (北から)	
PL 9. 1. SC09~SC11完掘状況 (西から) 2. SC09~SC12完掘状況	
PL10. 1. SC09鉄器出土状況 2. SD02完掘状況 (北から)	
PL11. 1. SDI8・SD21完掘状況 (北から) 2. SDI8・SD21完掘状況 (南から)	
PL12. 1. SP09出土鉄器 (鉄錆) 2. SP09出土鉄器 (鏡・斧)	
PL13. 1. 調査区遠景 (東より) 2. 西調査区全景 (東より)	
PL14. 東調査区全景 (西より)	
PL15. 西調査区遺構検出状況 (東より)	
PL16. 1. 掘立柱建物 (SB01) 検出状況 (南より) 2. 土坑 (SP47) 検出状況 (南より)	
PL17. 1. 掘立柱建物 (SB02) 柱穴土層 (南より) 2. 掘立柱建物 (SB02) 近景 (南より)	
PL18. 1. 住居跡 (SC03) 近景 (南より) 2. 住居跡 (SC05) 近景 (南より)	
PL19. 1. 住居跡 (SC03) 発掘風景 (南より) 2. 住居跡 (SC01) 近景 (南より)	
PL20. 1. 浦江遺跡全景 (東より) 2. 遺構検出状態 (南より)	

第1章 調査に至る経過

福岡市早良区入部地区においては、昭和62年度から開始された圃場整備事業に並行して、地内の道路改良事業が計画・施工されているところである。

そのうち埋蔵文化財課からの平成2年度事業照会に対する回答として、早良区土木農林課より東入部～西入部線の計画が提出された。対して本課からは事業予定地内に四箇古川、四箇船石遺跡群が存在することから、試掘ならびに協議の必要があるとの通知をおこなった。対象地の東半分では隣接地で、平成元年度、すでに圃場整備に伴う発掘調査が行われており、対象地隣地においても遺構を確認し、調査を行っている。また西側は平成2年度の圃場整備対象地に隣接している。その後圃場整備地内の試掘結果を受けて、全線の発掘調査対象地域を選定し、調査工程について原局との協議を行った。その結果調査対象地を3工区に分割し西側から、それぞれ平成2年度、3年度、5年度に発掘調査をおこなうこととし、順次調査を実施した。

また土木局道路計画課から平成2年4月7日付け、土木第80号により市道四箇内野線道路改良事業に伴い事前審査願いが埋蔵文化財課長宛てに提出された。当該地は四箇古川遺跡群に含まれており、試掘調査を行った結果遺跡の存在を確認したため、平成2年5月15日より調査をおこなった。

なお調査次数に関して四箇古川遺跡については、平成2年度におこなった東入部～西入部線、四箇内野線及び圃場整備地内での発掘調査について四箇古川遺跡群1次調査としている。圃場整備地内での調査については『入部III』(1992年)を参照されたい。



図1 四箇船石遺跡の位置 (1/50,000)

第2章 調査の経過と組織

調査に際しては以下の体制を組織したが、相次ぐ緊急調査で十分なる体制がとれなかった。しかし、関係各位の多大な協力によりその進行が無事進められたことを明示しておきたい。

四箇古川遺跡第1次調査（1990年）

調査委託者：福岡市早良区土木農林課

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課第1係

教育長 井口雄哉

部長 川崎賢治

課長 柳田純季

第1係長 飛高憲雄

調査庶務：中山昭則

調査担当：井沢洋一、長家伸

四箇船石遺跡第4次調査（1991年）

調査委託者：福岡市早良区土木農林課

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課第1係

教育長 井口雄哉

部長 花田兎一

課長 折尾学

第1係長 飛高憲雄

調査庶務：中山昭則

調査担当：吉留秀敏

四箇船石遺跡第6次調査

調査委託者：福岡市早良区土木農林課

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課第1係

教育長 尾花剛

部長 後藤直

課長 折尾学

第1係長 横山邦雄

調査庶務：寺崎幸男

調査担当：常松幹雄

試掘調査：菅波正人

調査庶務：吉田麻由美

調査担当：常松幹雄

調査・整理参加者

池田由美・衛藤美奈子・菊池栄子・鳥井原良治・原英晴・平野義雄・船越恒人・堀本敬四郎・吉川順岳・脇坂レイコ

第3章 遺跡の位置と地理的環境

四箇古川遺跡、四箇船石遺跡群は福岡市早良区大字四箇（旧早良郡入部村）に所在する。遺跡の立地する早良平野は、北部九州の脊梁をなす背振山塊に源を発する宝見川が北流、開析し、玄界灘に向かって開いている。平野部は南北約8km、東西約5kmであり、およそ20km²の面積を有する。平野内には河口部を中心に第三紀・洪積世丘陵、台地が残るが、多くは未発達の扇状堆積が複合、形成され、さらにそれらを浸食し、あるいは覆って薄い沖積堆積物が認められる。

早良平野の中で四箇古川遺跡、四箇船石遺跡群の位置は南東端にあたり、油山山塊の荒平山（394.9m）の西側山麓部に近い沖積地内にある。現在、一帯が水田化しているために旧地形を知ることは困難であるが、区画整理以前の水田形状、比高差、水田土壤などに微地形の反映が認められた。遺跡の立地する微地形の概要は、室見川の支流である貞島川の旧河道とそれにより略南北に分断された微高地から構成されている。

四箇古川遺跡、四箇船石遺跡群の周辺では、同じ立地条件をもつ沖積微高地内の遺跡が最近次々と明らかにされている。縄文時代遺跡はなお少ないが、東入部遺跡、清末遺跡、岩本遺跡、四箇遺跡などで縄文時代後、晩期の遺構、遺物が検出されている。弥生時代遺跡は多く、隣接する重留遺跡や岩本遺跡、清末遺跡、東入部遺跡などがある。これらは弥生時代前期から中期の集落跡と豪奢墓などの墳墓からなる。このうち東入部遺跡では弥生時代前期から中期の墳墓群と集落が検出された。このうち貞島川の西岸では方形の区画を有する豪奢墓群があり、多数の副葬品が出土した。弥生時代中期初頭から中期後葉に位置づけられ、早良平野南部の中心的集団墓地であったと考えられた。また、貞島川の東岸では弥生時代中期後葉の住居址群が検出されている。弥生時代後期は不明であるが、古墳時代前～中期には重留遺跡、岩本遺跡、清末遺跡、東入部遺跡などに集落や墳墓がある。この時期の古墳は重留遺跡群内に全長約75mの拌塚古墳があり、その西側に小規模の古墳群も築造されている。拌塚古墳は早良平野において最大規模墳である。古墳時代後期には集落と墳墓がやや離れ分布し、集落は重留遺跡などにあり、墳墓は東側の荒平山山麓に群集墳が展開する。なお、近年の調査で東入部遺跡のある沖積微高地においても古墳時代中期以降、後期にいたる数基の古墳が分布していることが判明した。古代では東入部遺跡で大型の掘立柱建物を持つ施設が検出されている。これは山麓斜面であり、一定の地山整形を伴っているとみられる。円面硯や越州窑系青磁なども出土していることから、地方官衙を構成する1つの施設であろうと考えられる。中世には沖積微高地の各所に再び集落の形成が多数認められる。岩本遺跡、重留遺跡、清末遺跡、東入部遺跡などがあり、方形の区画溝を持つ居館跡も岩本遺跡、清末遺跡で検出されている。このうち清末遺跡の居館跡は12世紀代の大型掘立柱建物群の营造に始まり、14世紀代まで継続する周辺では最大規模の施設である。調査担当者は早良平野内にみられる条理状の水田区画溝の考古学的成果を踏まえて、この施設に中世初期に始まる周辺の新田開発に拠点としての性格を与えている。

以上のように四箇古川遺跡、四箇船石遺跡のある地域は早良平野南部において、各時期を通じて中心的な役割を持つ遺跡が多い。遺跡の密集状態とも併せて、今後とも注意される地域であるといえる。



図2 調査地点配置図(1/4,000)

第4章、調査の記録

1. 四箇古川遺跡第1次調査

1. 調査に至る経過

福岡市早良区重留及び東入部地域では、昭和59年度から平成6年度までの8年間の予定で「入部地区圃場整備事業」が進められた。この事業の平成2年度の施工区域は、貞島川から西側の早良区東入部が相当する。

福岡市早良区役所では、圃場整備事業地内を貫くように、市道「四箇内野線」の建設を計画していた。この道路は貞島川（用水路）を横断する形で設定されており、この市道の南北方向の総延長は約214m、幅7mを測る。当該地の東側に隣接した圃場整備事業の入部第4次調査では、旧河川内から15世紀代の遺物が多量に出土したことから、当該地も調査の対象として発掘調査を実施した。

2. 概要

当該地は、早良区大字重留字ケコジ2042-1・～字カイコ2051に所在する。

室見川を中心とする大小河川の開拓によって形成された早良平野の南側狭隘地にあって、室見川右岸に位置し、遺跡は沖積地に形成されている。現状は水田である。地形的には旧河川上面に位置しており、河川の埋没後に生活面が形成されている。

河川跡の幅は調査区内では最大約11mを測るが、全体の幅は確認できない。この河川跡は、隣接の入部4次調査でも検出しており、ここでは河川跡の深さは約1.7mを測る。川底には暗灰色粘質土と砂礫が互層に堆積していた。川底から明代の青磁や下駄などの木製品が出土しており、15世紀初頭の時期が考えられる。

3. 遺構説明

当該調査での遺構面は2面存在し、第1面の遺構面は暗灰色粘質土である。遺構は戦国～江戸時代初期の土壙、ピット、河川跡等である。遺構は少なく、遺物は15～17世紀を示している。2面の遺構面は褐色砂質土で、重複した河川跡を検出した。室町～戦国時代の河川跡を検出した。遺物は少ないが、15世紀代を主体とする。

4. 遺物説明

第1面の遺構面から初期伊万里、明代の染付、青磁碗片等が出土した。第2面の河川跡からは明代の青磁碗片の他、土師器杯、皿等が出土している。何れも破片のため図示できない。

5. まとめ

今回の調査では重複した河川跡の変遷状況を把握することができたが、これらの時期は15～16世紀の短い時期に集中している。隣接の河川跡の調査では、多量の遺物が出土しており、河川跡と考えよりも用水路として開削されたと考えられ、遺物はその時期を示すものと考えられる。



図3 調査区全景（南から）



図4 河川跡土層状態

2、四箇船石遺跡第4次調査

1) 調査の経過

発掘調査の対象範囲は工事対象地の古くからの道路部分であり、東西方向に細長く、長さ175m、幅4.2~6.0mの範囲であった。現在の標高は28m前後である。対象地の隣地は南側が1990年度に完成した農業用水路、北側が水田である。発掘調査では何れの施設より深く掘り下げるに至る。このため、各施設の崩壊を避けるために調査地との間に1m前後の引きを取りることにした。また、調査区内で西側75mの範囲は四箇古川遺跡第1次調査の結果、河川跡であり、良好な遺構の存在は期待できないと予測された。なお、この部分を一部掘削したところ、河川跡まで地表から2m以上の深さとなり、壁面も砂礫層であり湧水も多い。調査区外への崩壊の恐れと調査作業の安全確保上、一部の土層観察、記録をおこない、作業を断念した。

調査はまず最上部の水田耕上、床土を重機により除去した。耕土は調査範囲内の処理が必要であったため、西側の河川跡部分に積み上げた。以下は手作業にて掘り下げた。なお、1990年度の農業用水路の設置とともに調査範囲の道路部分を横切る暗渠が数ヶ所あり、これを破壊せぬように注意した。こうした各種の調査時の制約のために、重機を用いた作業が予想以上の期間必要となつた。調査にあたっては東端を起点とし、10m単位のグリットを設け、東から西に向かって1区・2区・3区…と呼称した。調査終了後は、再び重機により構造物に注意しながら西側から順に埋め、転圧、整地した。

2) 地層

調査区の南北両壁面について土層観察を実施した。しかし、北壁は近世に埋没したと見られる道路に沿った溝跡(SD01)が現れたために、南側のみ土層図を作成した。基本的堆積は1~7区と8・9区に分かれる。1~7区は沖積地内微高地にあたり、遺構検出面まで1m以下の覆土が観察できた。微高地上の基本土層は、道路建設にともなう造成土(I層)、造成以前の水田土壌、床土群(II層)、暗褐~黒褐色砂質土(III層)、黄褐色砂質土(IV層)、砂礫層(V層)となる。V層から田層までは連続的な堆積と見られるが、II層とI層は下位層との間に不整

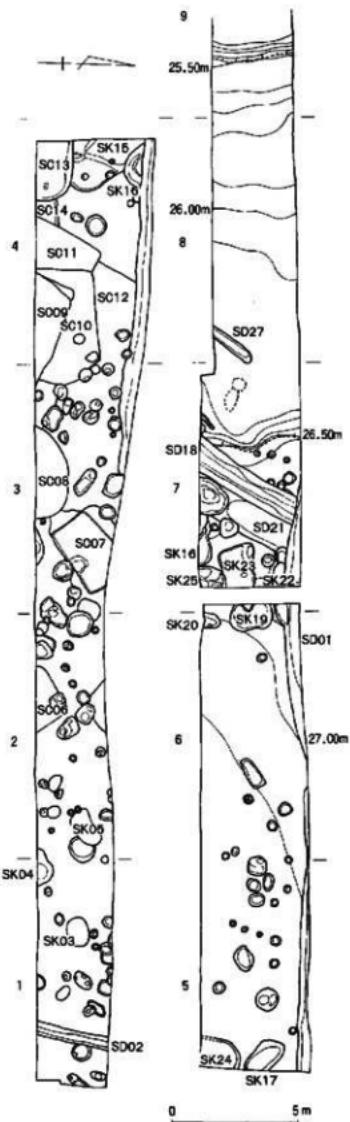


図5 調査区全体図(1/200)

合となる。III層下部からIV層上面が遺構検出面である。調査範囲の中でIV層上面が最も高く現れた5・6区では、III層は存在せず、II層の直下はすぐIV層となる。なお、III層は遺物包含層であり、绳文時代晩期や弥生時代の遺物を含んでいる。8・9区ではI、II層の下は一旦砂疊層となり、2m程下で水成の青灰色粘土となる。この砂疊層中には少量であるが中世の遺物が出土しており、V層とは異なるものと見られた。これは、東から西へ下がる旧河道の谷地形に堆積した沖積世堆積物であり、隣接する四箇古川遺跡の河川跡と同様の時期に堆積したものと見られる。

3) 遺構と遺物

本調査区では微高地を中心として竪穴式住居9棟、溝4条、土壙18基、柱穴100以上を検出した。調査範囲が狭いために全体像のわかるものは少ない。以下、代表的遺構について説明を加えたい。

SC06：2区の南壁にかかる平面方形の竪穴式住居跡である。住居の北側隅部を検出した。方位はN-33°-Wに向き、略東西2.2m、略南北1.7m以上、壁高は0.2mを測る。床面に径30cm、深さ15cmの掘り方がある。炭化物が多く入っていた。覆土から少量の土器片、石器類が出土した。土器には甕の口縁部（1～3）、広口壺の口縁部（4）がある。これらは須歎II式である。石器には黒曜石製の使用痕がある剝片（19）、石核（20）、楔形石核（21）などがある。

SC07：3区東側にある平面長方形の竪穴式住居跡である。住居の北側隅部は調査区外に延びる。方位はN-44°-Wに向き、長辺3.1m、短辺2.3m、壁高は0.15mを測る。北西側の長辺に沿ってベット状遺構が付く。幅は0.4～0.5mを測り、床面には5cm前後の段差がある。南東側長辺の中央床面に壁際土壙がある。幅70cm、長さ80cm、深さ20cmである。また床面中央に焼上面があり、炉跡とみられる。柱穴は未検出であるが、床面上に小穴2を認めた。何れも平面5cm×8cm、深さ10cm以下である。覆土中から少量の土器片、石器が出土した。土器には甕の口縁部（5）、器台（6）がある。これらは須歎II式である。石器には砥石（15）がある。粘板岩質の素材であり棒状をなす。

SC08：3区の南壁にかかる平面が円形あるいは橢円形の竪穴式住居跡である。住居の一部の検出であるため、規模は不明であるが東西3.8m以上、南北1.3m以上、壁高は0.3mを測る。貼床が1面ある。床面中央に径70cm、深さ20cmの掘り方がある。炭化物と焼土が多く入っていた。炉跡と考えられる。また、この炉跡に連続して北側床面に浅い窪みがある。なお、壁面土壙では浅い壁溝が認められるが、平面的には検出できなかった。覆土から少量の土器片が出土したが、図化できるものはない。

SC09：3・4区の南壁にかかる平面方形の竪穴式住居跡である。SC10を切る。住居の北側隅部を検出した。方位はN-20°-Eに向き、略東西4.3m以上、略南北1.8m以上、壁高は約0.2mを測る。床面北東側に2つの柱穴がある。壁溝が北西端で切り合い、1度の建て替えがあったと見られる。覆土や床面から少量の鉄器、土器片、石器類が出土した。このうち鉄器は2点が壁溝内から出土した。13は完形の鉄鎌である。刃は緩く湾曲し、基部と約20°の角度がある。長さ16.5cm、刃部幅2cm前後、厚さ0.5cmを測る。14は鉄鉈である。鋸のために膨らんでいる。長さ9cm、幅1.9cmを測る。土器には甕の口縁部（7～9）がある。7は夜臼式、8、9は須歎II式である。石器には砂岩製の石鎌（16）、黒曜石製の石核（22）がある。

SC10：4区の南壁にかかる平面方形の竪穴式住居跡である。SC09に切られ、SC11、12を切る。住居の北側隅部を検出した。方位はN-05°-Wに向き、東西3.7m、南北2.3m以上、壁高は0.2mを測る。西壁直下の床面に幅80cm、長さ70cm、深さ10cmの掘り方があり、砥石が1点出土した。壁際土壙か。東側床面に小穴2がある。覆土中から土器片、石器類が出土した。土器には甕か鉢の口縁

部(10)、広口壺の口縁部(11)がある。これらは須玖II式であろう。石器には黒曜石製の石核(23)、花崗岩製の砥石(27)などがある。

SC11: 4区の南壁にかかる平面方形の竪穴式住居跡である。SC10に切られ、SC12を切る。住居の北側隅部を検出した。方位はN-22°-Eに向き、略東西1.9m以上、略南北2.9m以上、壁高は0.2mを測る。床面に径60cm、深さ20cmの掘り方がある。覆土から少量の土器片、石器類が出土した。土器片に図化できるものはない。石器には黒曜石製の剝片(24)がある。剝離状態から繩文時代後~

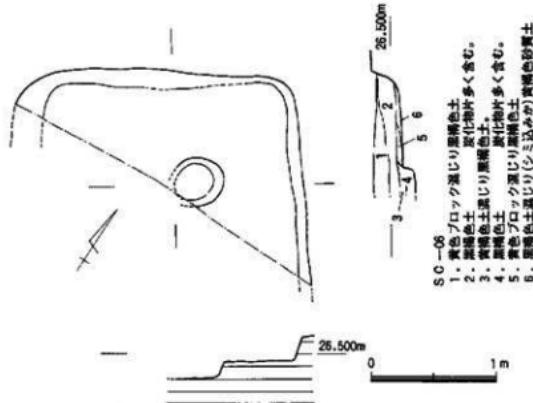


図6 SC08造構図(1/40)

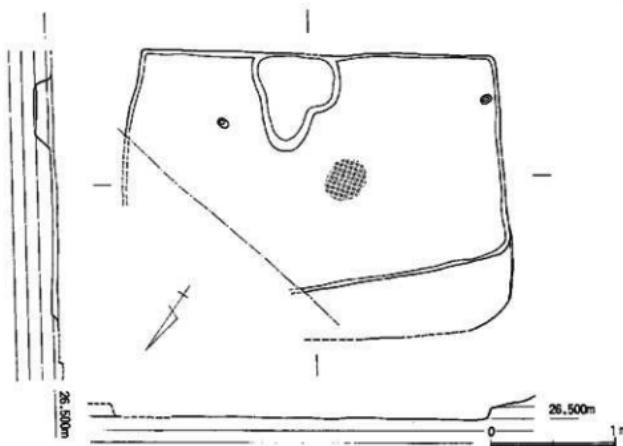


図7 SC07造構図(1/40)

晩期の所産である。

SC12：4区北側にある平面方形の竪穴式住居跡である。住居の北側はSD01に切られ、南側はSC10, 11に切られる。方位はN-21°-Eに向き、東西3.0m、南北3.0m以上、壁高は0.2mを測る。住居の中央が窪み、三方がベット状に高まる。しかし、平面が不整形で、段が不明瞭なことからみて、ベット状遺構として良いか疑問である。中央床面とは15cm前後の段差がある。床面に小穴4を認めたが、柱穴になるか不明である。覆土中から少量の土器片、石器が出土した。土器には固化できるも

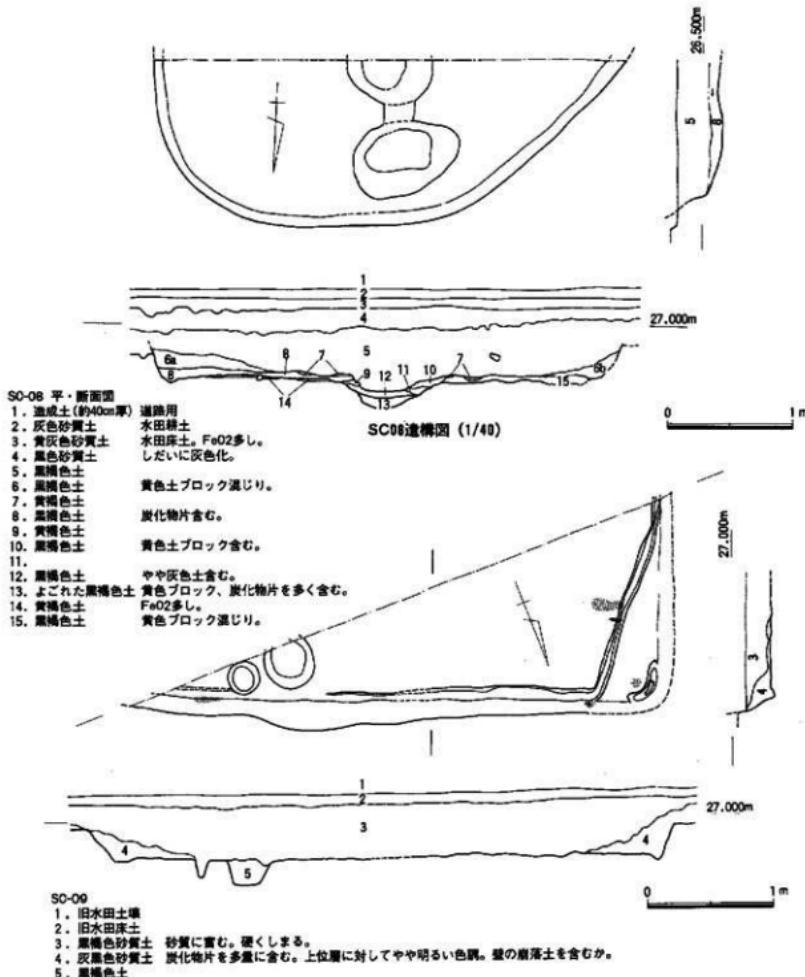


図9 SC08・SC09遺構図 (1/40)

のない。石器には黒曜石製の楔形石核（25）、剥片（26）がある。

SC13：4区西側にある隅丸もしくは楕円形の竪穴式住居跡である。SC14、SK15を切る。住居の大半は調査区外である。方位はほぼ東西に向き、長辺2.3m以上、短辺1.4m以上、壁高は約0.15mを測る。柱穴は東側床面上に小穴1を認めた。何れも平面25cm×15cm、深さ10cm以下である。覆土中から少量の土器片、石器が出土したが、図化できるものはない。

SC14：4区西側にある。SC11、SC13に切られ、断片のみ現れた。竪穴式住居跡であるかの断定は

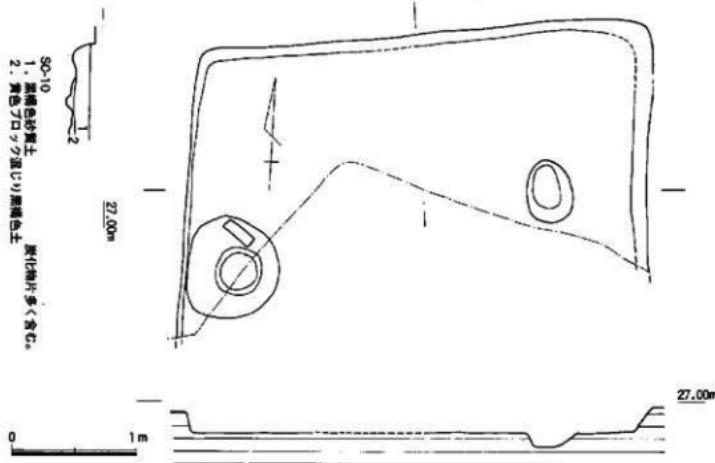


図10 SC10造構図 (1/40)

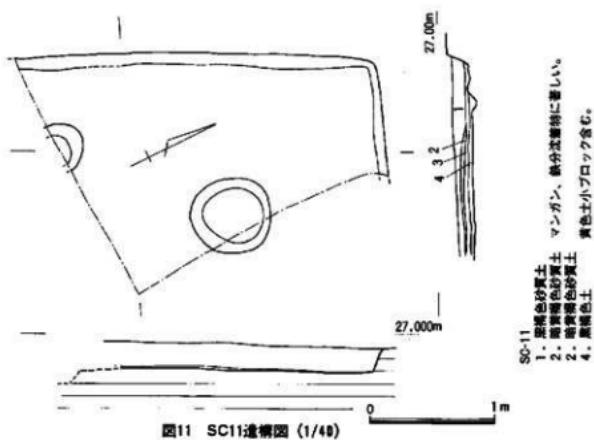
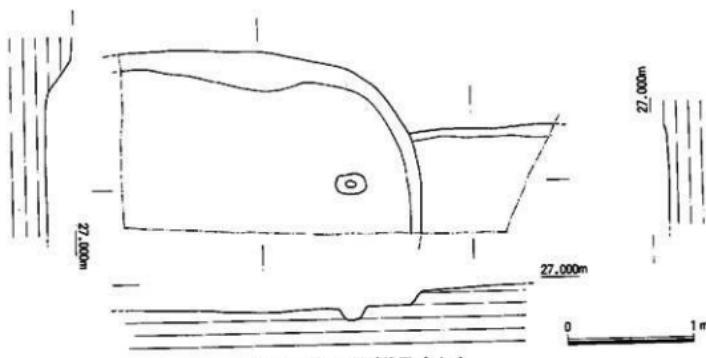
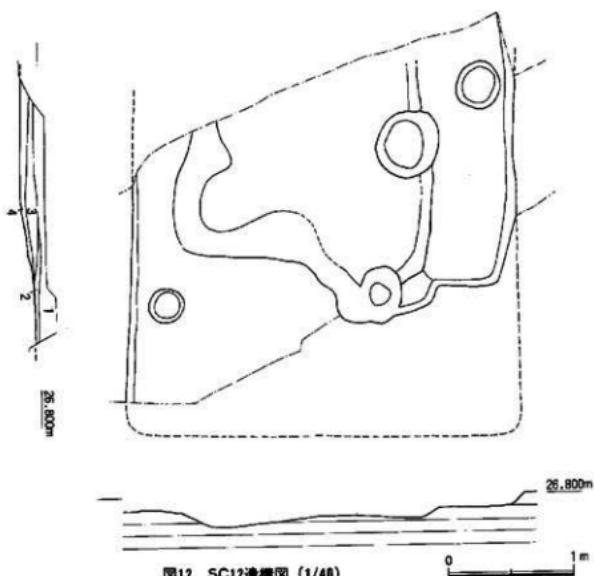


図11 SC11造構図 (1/40)

SD-12

1. 茶褐色砂質土、鉄分多く含む。下位層に卵殻
 2. 黒褐色砂利土、黒い砂利。ジオラマリ。炭化物片多く含む。深くしまる一張面か
 3. 灰褐色砂質土、炭化物片含む。比較的きれい。
 4. 灰褐色砂質土、中央部くぼみが二箇所。下半は砂質質。



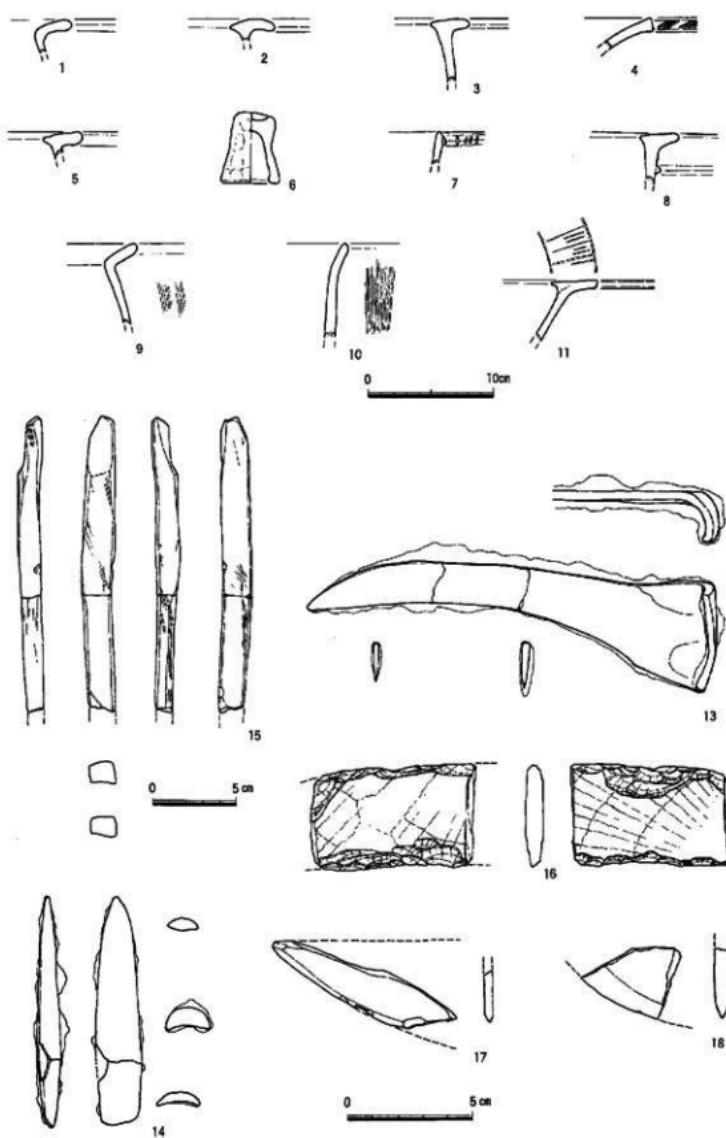


図14 住居跡出土遺物 1 (1/4, 1/3, 1/2)

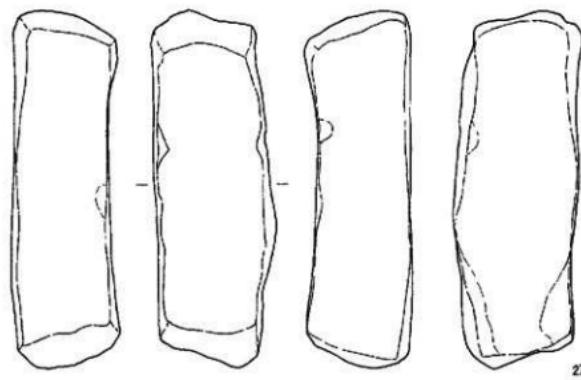
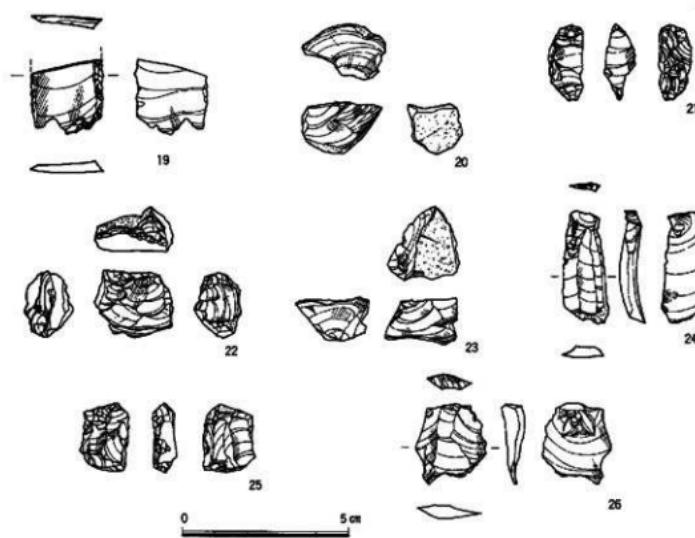
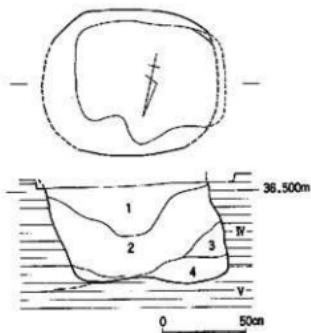
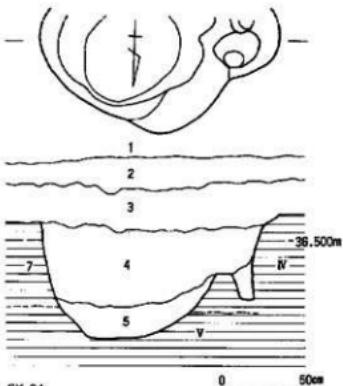


圖15 住居跡出土遺物 2 (1/4, 2/3)



SK-03
1. 黒褐色砂質土
2. 黒褐色土
3. 黒褐色砂粘土
4. 黄色土と黒褐色土の土層 全体に水分が多く膠粘質。

図16 SK03遺構図 (1/30)



SK-04
1. 黒色砂質土 包含層。
2. 黑褐色砂質土
3. 黑褐色砂質土 黄色ブロックを含む。
4. 黑褐色土 水分が多く膠粘質。黄色土を含む。
5. 黑褐色土 膠粘質。

図17 SK04遺構図 (1/30)

困難であるが、壁面が直線的であり、床面が平坦であることから、住居の可能性を認めた。壁高は5cm前後である。

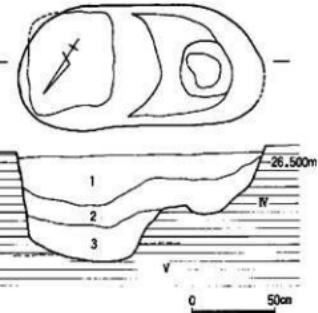
SK03：1区で検出した。楕円形の土壙である。主軸はN-78°-Eであり、長さ1.05m、幅0.9m、深さ0.6mを測る。SK03-SK05は主軸、規模が共通し埋土も何れも自然流入土である。時期は不明であるが、ほぼ同時期の所産と考えられる。大型建物の柱掘り方の可能性もあるが、今回の調査範囲では判断困難である。

SK04：1区で検出した。南側壁面にかかる。西側に小穴をもつ楕円形の土壙である。主軸はN-87°-Eであり、長さ1.45m、幅0.7m以上、深さ0.7mを測る。

SK05：2区で検出した。楕円形の土壙である。床面は2段掘りである。主軸はN-57°-Eであり、長さ1.45m、幅0.75m、深さ0.65mを測る。遺物は少ないが、黒曜石製の搔器(31)が出土した。

その他の土壙：この他に1-5基の土壙を検出した。

その分布は4・5区付近と7区付近に集中する。平面形は何れも不整形であり、規格性を認めるものは少ない。土壙内から出土した遺物には、土器類、石器類、土製品がある。その中で図化できたものを示す。SK16からは鍔先口縁をもつ広口壺(28)、SK17からは甕底部(12)、黒曜石製の石錐(33)や楔形石核(32)、土製投弾(35)、SK18からは黒曜石製の楔形石核(38, 39)、SK20からは完形の鉢(29)、SK23からは土製投弾(36)、SK25からは高杯の杯部(30)、黒曜石製の石核(34)などが出土した。



SK-05
1. 黒褐色砂質土
2. 黒褐色土 黄色ブロックを含む。炭化物片あり。
3. 黄色土混黒褐色土 膠粘質。

図18 SK05遺構図 (1/30)

形は何れも不整形であり、規格性を認めるものは少ない。土壙内から出土した遺物には、土器類、石器類、土製品がある。その中で図化できたものを示す。SK16からは鍔先口縁をもつ広口壺(28)、SK17からは甕底部(12)、黒曜石製の石錐(33)や楔形石核(32)、土製投弾(35)、SK18からは黒曜石製の楔形石核(38, 39)、SK20からは完形の鉢(29)、SK23からは土製投弾(36)、SK25からは高杯の杯部(30)、黒曜石製の石核(34)などが出土した。

SD01：調査区北端に沿って40m以上検出した。幅0.7m以上、深さ0.4m以上であり、断面は造台

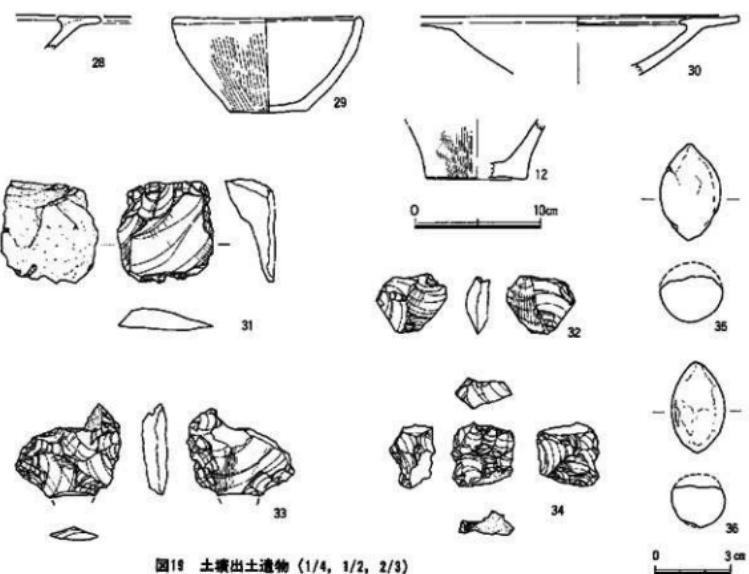


圖19 土壤出土造物 (1/4, 1/2, 2/3)

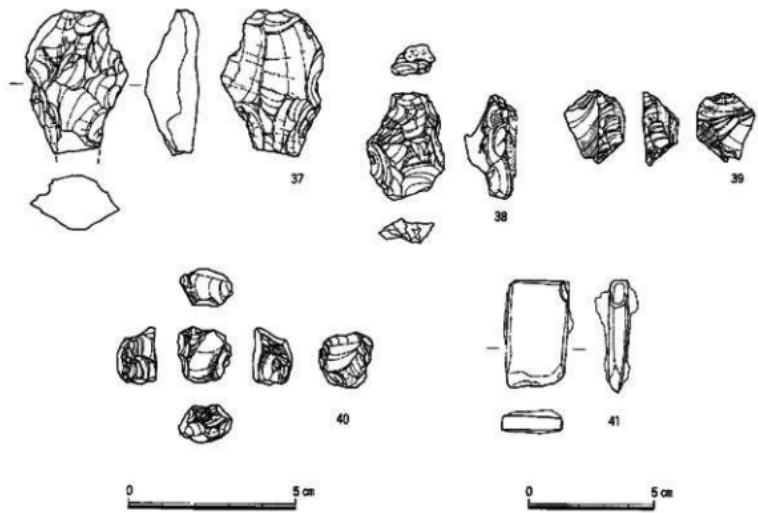


圖20 濟出土造物 (1/2, 2/3)



図21 SD02縦構図(1/20)

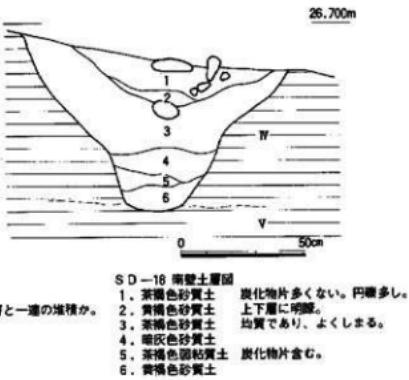


図22 SD18縦構図(1/20)

形を呈する。長さ約10mを確認した。溝内から少量の弥生-古代土器片、石器類、中-近世陶磁器類などが出土した。図化できたものは少ないが、土器には甕(47~49)、壺(50・51)、小型の鉢(52)があり、石器には古銅輝石安山岩製の石錐(37)がある。何れも摩滅が激しい。近世以降の用水路と見られた。

SD02: 1区東側で検出した。主軸はN-10°-Eに向き、長さ3mを確認した。断面は逆台形であり、幅0.7m、深さ0.45mを測る。覆土下部に流水の痕跡を示す砂層がある。多くの土器片が出土した。土器類には甕(1~12)、大型甕(13)、甕底部(17~24)、鉢(14, 15)、広口壺(16)、器台(25~27)がある。甕底部にやや古い特徴を残すものがあるが、ほとんどが須恵II式の範囲に含まれるものである。

SD18: 7区で検出した。この位置は微高地の西側端部にあたり、この溝はその斜面の肩部に沿って設けられている。主軸はN-26°-Eに向き、長さ4.6mを確認した。断面はV字形であり、幅1.1m、深さ0.7mを測る。東側に並行してSD21がある。覆土は風化土層であり、上部にしたがい土壤化が進む。なお、覆土には流水の痕跡はない。上部に多量の円窪、土器類、石器類が出土した。土器類には甕(1~10, 13)、甕底部(11, 12)、鉢(14, 20)、蓋(15)、高杯(19)、器台(21)、粗製ミニチュア形土器(16~18)がある。何れも須恵II式の範囲に含まれるものである。石器には石核(38)と楔形石核(39)がある。

SD21: SD18と並行し、その東側に検出した。SD18と同様に微高地端部に沿って設けられている。覆土においてSD21が古いと判断した。斜面上方での浅い段落ちとして認めたが、床面は凹凸が激しい。西側の壁は失っているが、断面形態は床面が広い逆台形を呈するとみられた。幅1.2~1.3m、東側の壁高約30cmである。覆土中から少量の土器片、石器片、鉄器などが出土した。土器は小片であり、図化は困難であった。石器には石核(40)、鉄器には小型板状鉄斧(41)がある。

SD27: 8区東側に検出した。微高地斜面下部の粘土層上面で検出した。上部は削平されている。調査区内に端部があり、南側は調査区外に延びる。長さ2mを確認した。SD18, SD21とは並行する方位を取る。断面形は浅いU字形を呈し、幅0.45m、深さ0.1mを測る。覆土は黒色土であり、遺物の出土はない。

4) その他の遺構と遺物

この他に調査区内からは100基を越える柱穴が検出された。その中で遺物の出土した柱穴も多く、

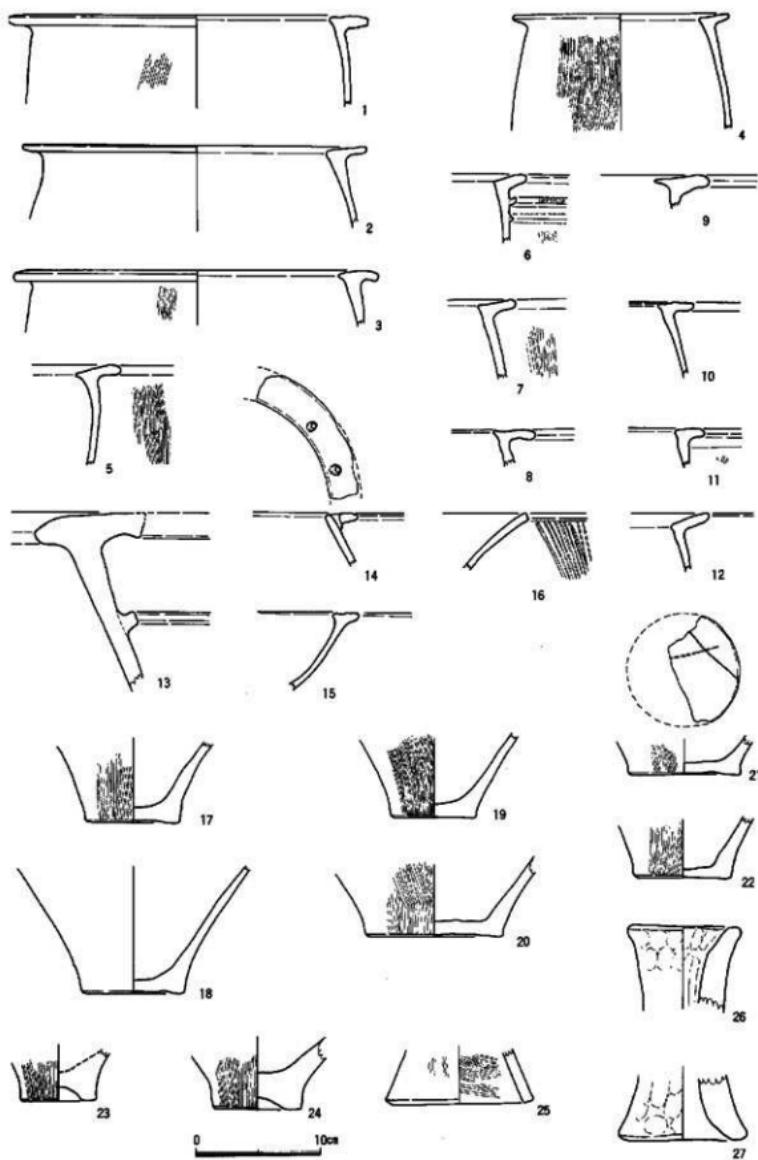


图23 SD02出土遗物 (1/4)

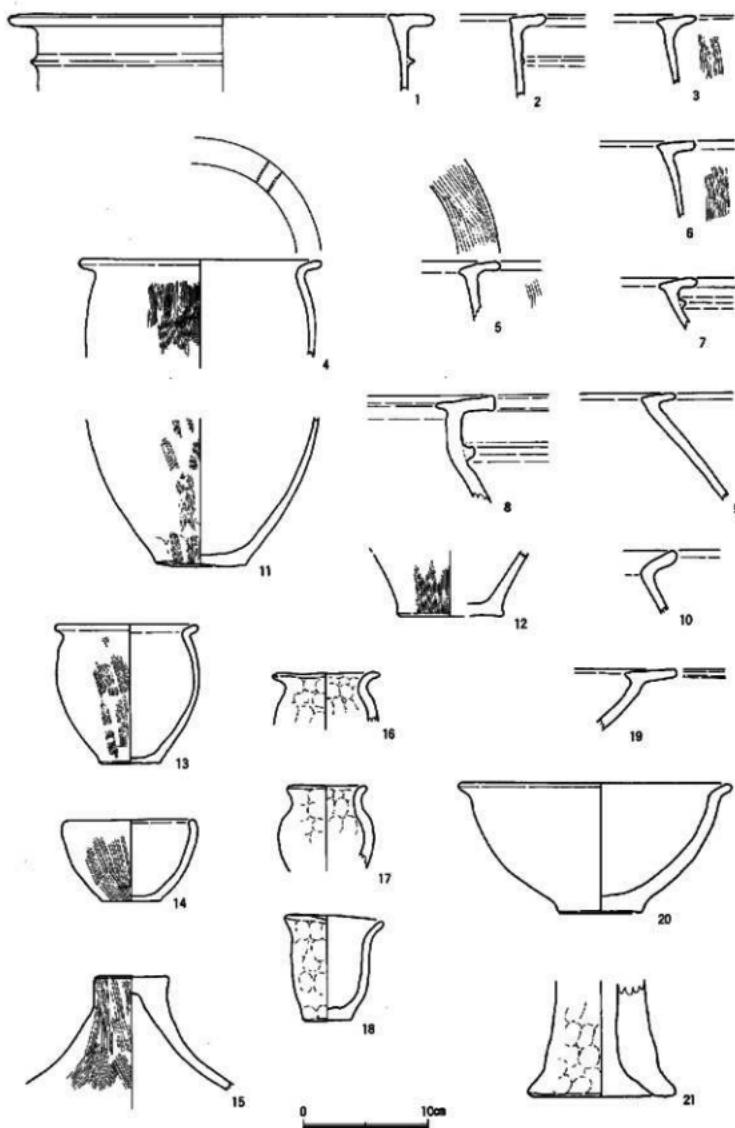


图24 SD18出土遗物 (1/4)

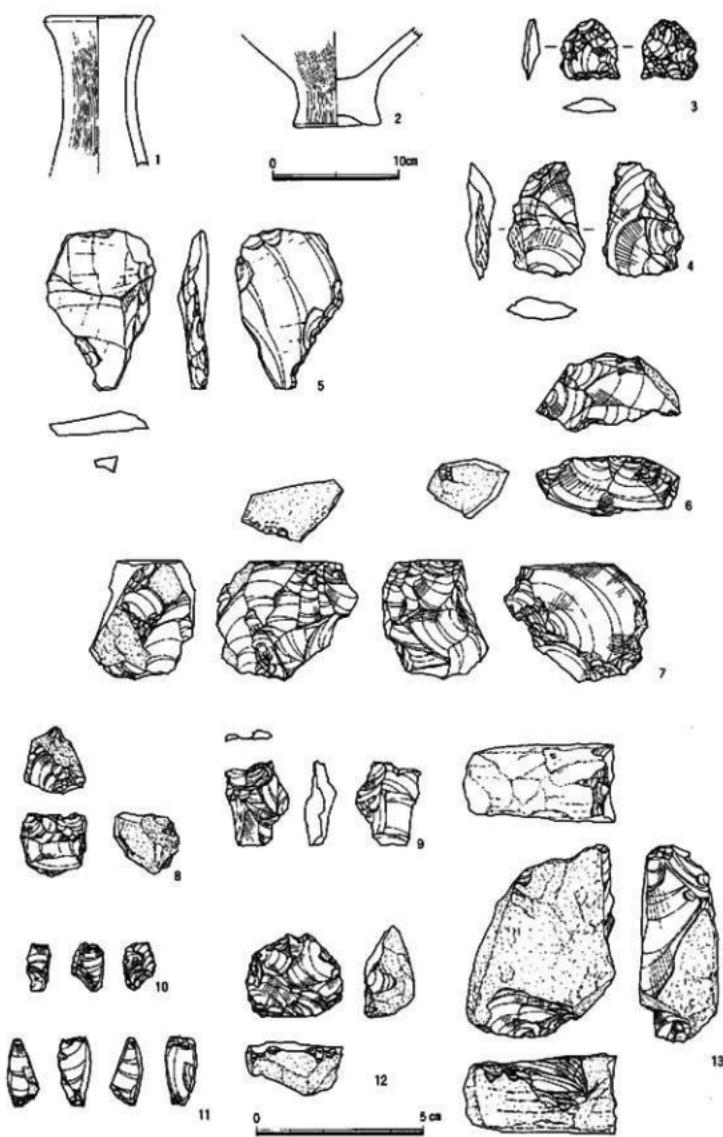


图25 柱穴出土遗物 1 (1/4, 2/3)

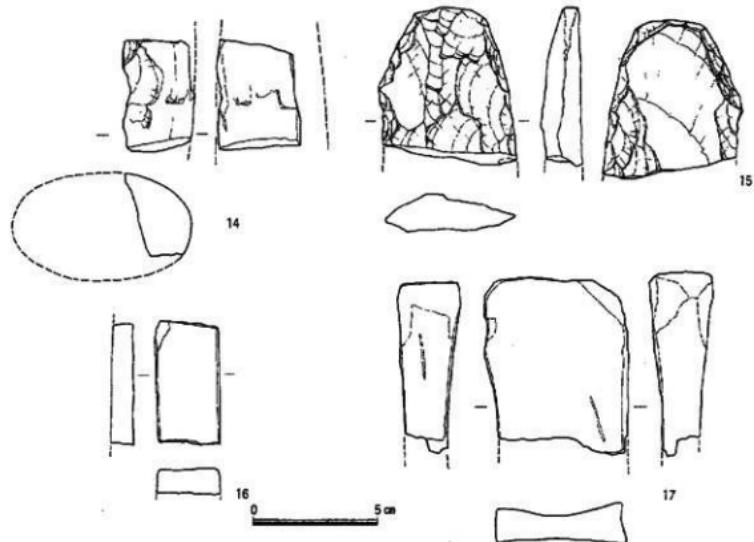


图26 柱穴出土遗物2 (1/2)

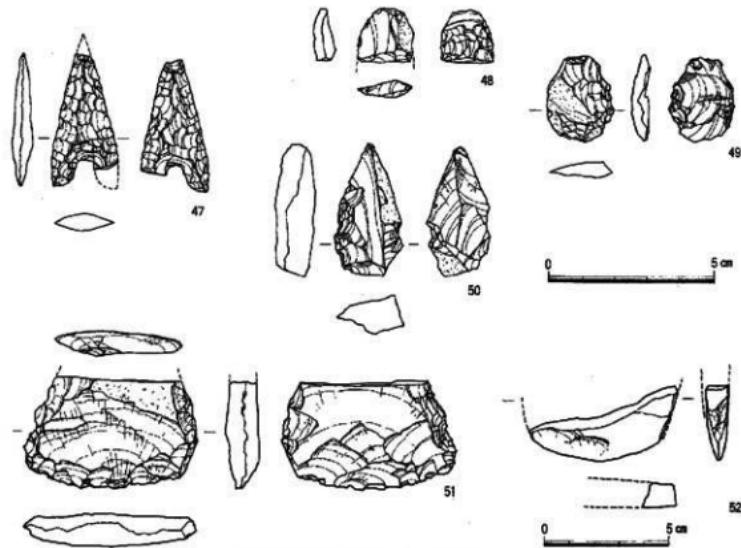


图27 包含层出土遗物1 (2/3, 1/2)

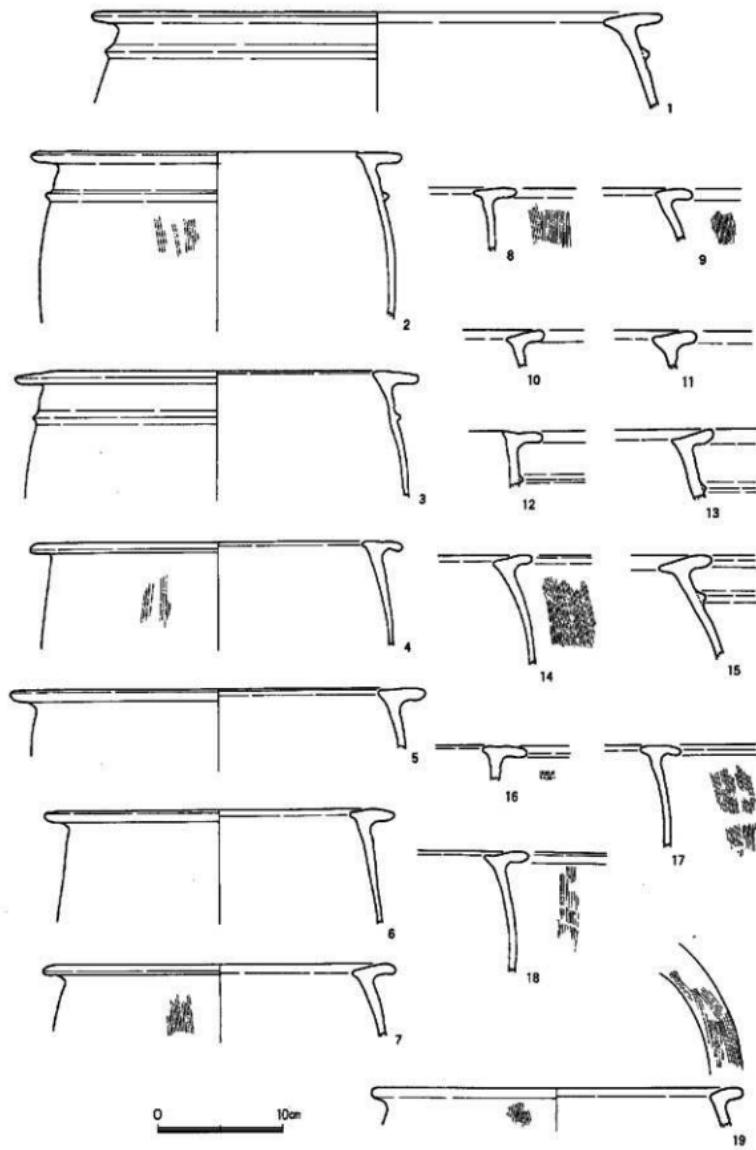


图28 包含层出土遗物2 (1/4)

1区包含层

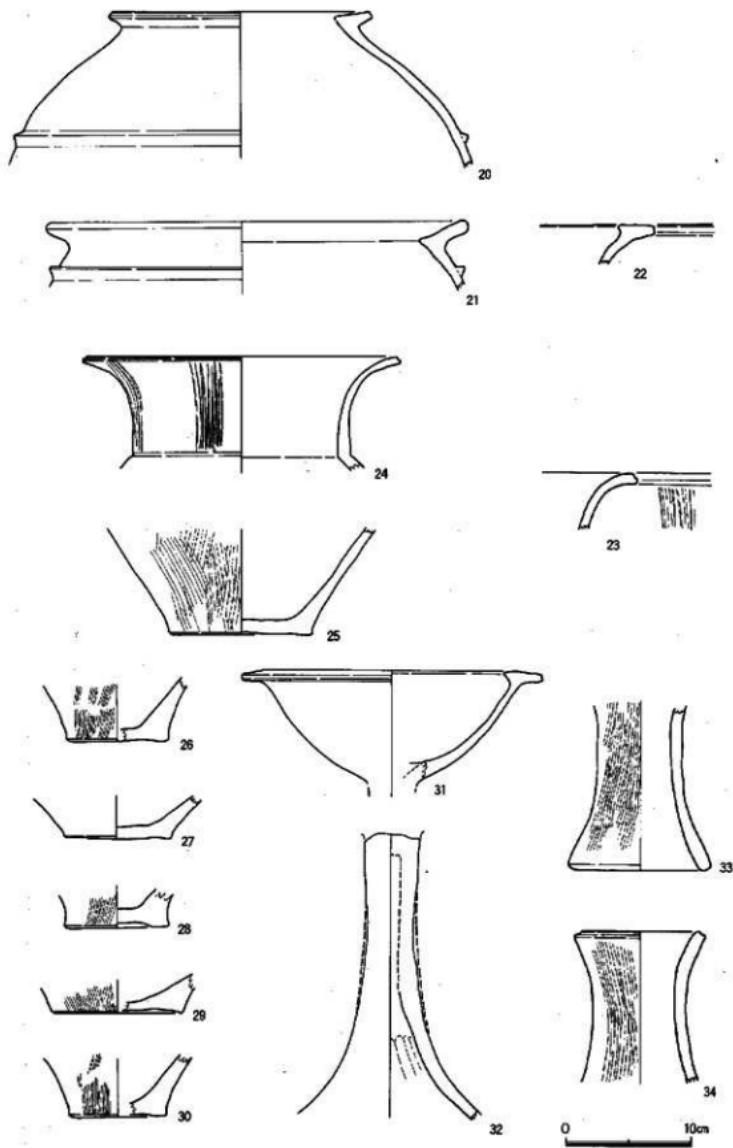


图29 包含层出土遗物3 (1/4)

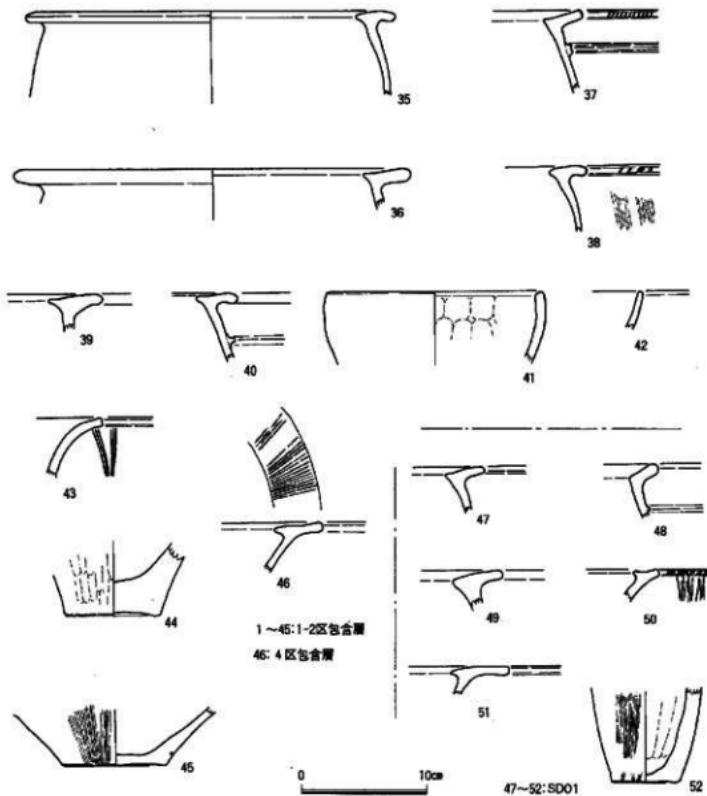


図30 包含層出土遺物4 (1/4)

代表的なものを示した。土器類には甕底部(2)や器台(1)がある。甕は底部が厚く、やや上げ底となる。弥生時代中期前半の特徴をもつ。石器には剥片石器と礫石器があり、剥片石器には石鏃(3)、石鎌未製品(4)、石錐(5)、石核(6~8、12、13)、楔形石核(9~11)がある。石錐だけは古銅輝石安山岩の横長剝片を素材とし、他は全て黒曜石を素材としている。礫石器には磨製石斧(14)、偏平打製石斧(15)、砥石(16、17)などがある。磨製石斧、打製石斧は玄武岩を素材とする破片である。砥石は何れも砂岩を素材としている。

また、主に1~4区にあった包含層から多くの遺物が出土した。遺物には土器類、石器類がある。土器類には甕(1~21、25~30、35~40、44、45)、壺(22~24、43、46)、高杯(31、32)、鉢(41、42)、器台(33、34)などがある。これらは須次I~II式に位置付けられる。石器類は剥片石器として石鏃(47)、石鎌未製品(48~50)、搔器(51)、石核などがある。搔器は古銅輝石安山岩、他は黒曜石を素材とする。礫石器には磨製石斧(52)がある。刃部の破片であり、偏平に仕上げている。

3. 四箇船石遺跡 6次調査

調査の概要

調査地は、室見川の東岸の沖積平野に位置する。標高は、26~27m前後である。調査区は、道路の拡幅・舗装という性格上狭長である。現況の舗装道路をはさんで東西に分かれる。ここでは西調査区と東調査区と呼ぶ。現況道路をはさんで東西は、これまでの調査から旧河川の流路にあたるとされており調査の対象から除外した。

遺構の分布

西調査区は、幅約4mで、東西100mにわたる。東端から20mで旧河川の落ち際を確認した。流路は、南北方向と考えられる。弥生土器の破片を含む。遺構は、掘立柱建物2棟、竪穴住居跡5基、このほか土坑や多数の柱穴がある。掘立柱建物は3個の柱穴や2個の柱穴の状況から推定をこころみたものであり、これだけの所見で、規模の復元は不可能である。円形プランの住居跡と切りあう柱穴もみられるが、時期は弥生後期以降としかいえない。住居跡は、全体のプランが確認できたものではなく、概数である。西端から1区から7区とし、10m間隔で割り付けた。

東調査区の現況は、田であり、幅3~4mで全長40mにわたって掘削をおこなった。清掃の結果確認できたのは、旧田面にかかる杭列であった。基盤は、円礫が多く含まれていることから、古くは氾濫原であったと考えられる。

検出遺構

調査区は(図32・33)に示すとおり狭長でトレンチ調査の延長といった感がつよい。したがって検出された遺構の多くは断片的で、推測の域をでないのだが、できるだけ積極的に遺構と認定した。

掘立柱建物

SB-01 円形プランの住居跡を切る不整形の土坑を含め、3つの土坑を掘立柱建物の柱穴とみなした。南の切られていない土坑中央部を起点とすると柱間は東西2.9m、南北2.6mをはかる。柱痕跡は認められなかった。この状況だけで桁行、梁行といった話はさけよう。各埋土から時期を決めうる遺物は検出されなかった。

SB-02 遺構検出の段階で0.8m×1.1mの堀形をもつ土坑中央に柱痕跡がみとめられた。西接する土坑の埋土の色調は同様で、各土坑中央部を起点とすると柱間は東西2.3mをはかるものである。断面立ち割の結果、SP-23の土層に径25cm程度の柱痕跡を確認できた。柱痕の外側は黄灰色土と暗茶色の土層が錦状に堆積していた。各埋土から時期を決めうる遺物は検出されなかった。

住居跡

SC-01 方形プランの住居跡、調査区の境に焼土が堆積しており炉跡と考えられる。主柱穴は不明である。埋土から時期を決めうる遺物は検出されなかった。

SC-02 方形プランの住居跡、主柱穴は不明である。埋土から砾石一点が出土した。

SC-03 円形プランの住居跡、主柱穴は不明である。埋土から時期を決めうる遺物は検出されなかった。

SC-04 方形プランの住居跡、主柱穴は不明である。埋土から時期を決めうる遺物は検出されな

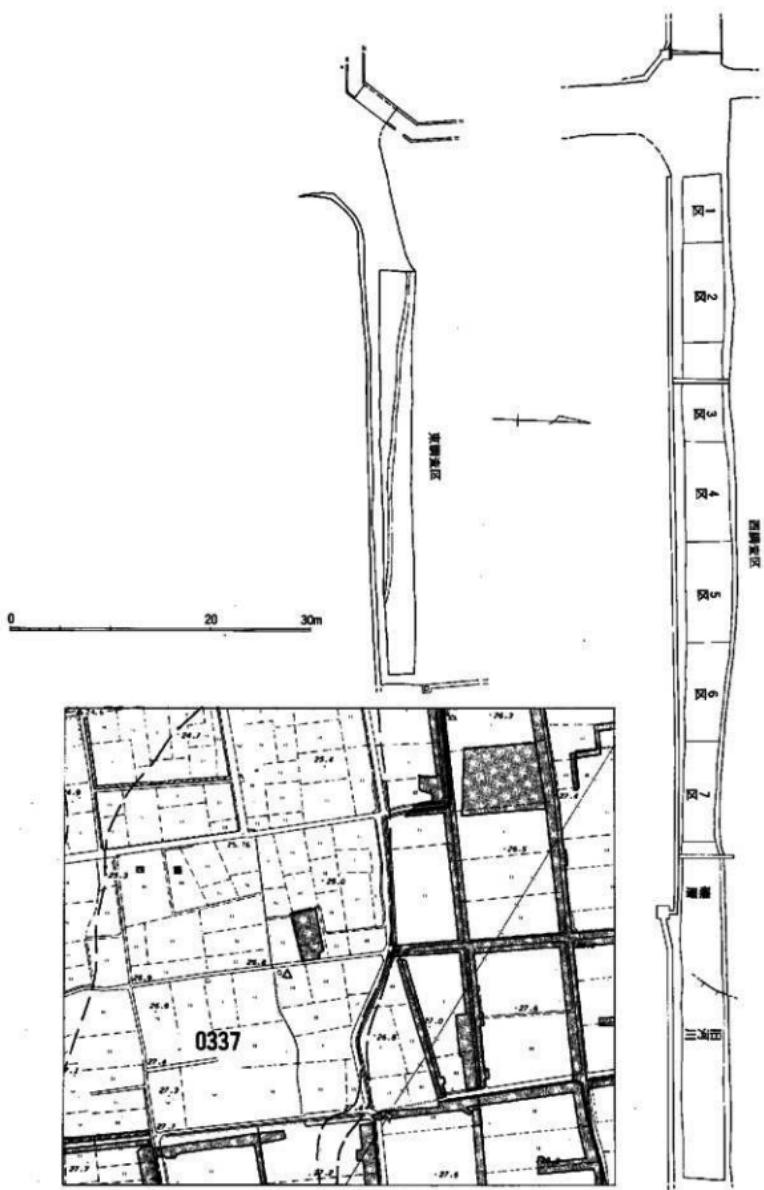


图31 四幡船石造路 6次调查区位置图

かった。

SC-05 円形プランの住居跡、主柱穴は不明である。埋土から時期を決める遺物は検出されなかった。

SP-47 長軸1.56m、短軸1.1mの楕円形の土坑である。

以上、遺構については不確定な要素が多い。今後周辺域の調査を絡めて位置づけたい。

出土遺物

遺物は弥生土器と土師器の細片が主で、その量は、コンテナ5箱である。確実に遺構に伴うものは少ない。

001は、弥生中期の広口壺の破片である。もともと小ぶりの器種で、口径23.8cmをはかる。淡黄灰色を呈し、砂粒を多く含む。SX-01出土。

002は、弥生中期の丹塗要形土器の破片である。口縁端部に刻目を回らし、頸部にM字突帯を付す。口径33.2cmをはかる。胎土は淡灰色を呈し、精良。磨滅が著しい。SX-01出土。

003は、弥生中期の要形土器の破片である。口縁は内側に迫り出し、端部は肥厚する。頸部に三角突帯を回らす。口径23.0cmをはかる。外面と頸部内面まで煤を付す。胎土は淡茶灰色を呈し、砂粒を多く含む。検出面出土。

004は、砂岩の砥石で中央部で欠損する。SC-02出土。

005は、検出面出土の投弾で一方の端部を欠く。胎土は黄灰色を呈し、砂粒を多く含む。

006は、糸引き底の土師皿である。口径8.5cmをはかる。検出面出土。

まとめ 西調査区は、遺構の分布が密であり、未調査の北側の畠地についても同様の状況が想定できる。遺構の時期は特定できなかったが、須恵器は含まれていないという状況から弥生中期から古墳時代前期にかけてと推定される。

小結

今回の調査によって弥生時代から古墳時代にかけての遺構の分布を確認できた。掘立柱建物が北側にかけてどのように展開するか興味がもたれる。また円形プランの住居跡も北側に広がることは確実であろう。

以上、遺構については不確定な要素が多く、今後北側で調査の機会があれば、小文の所見もより具体性を帯びよう。

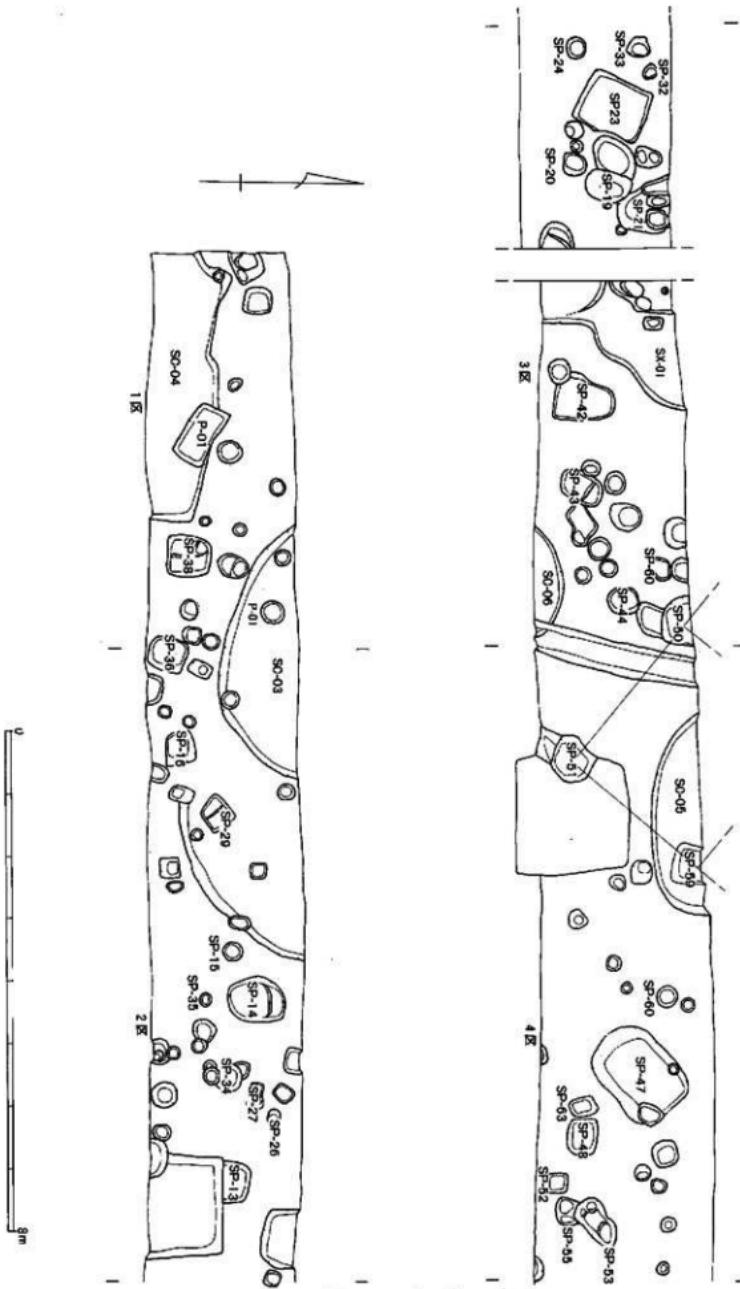


図32 遠構の配置 1 (1/88)

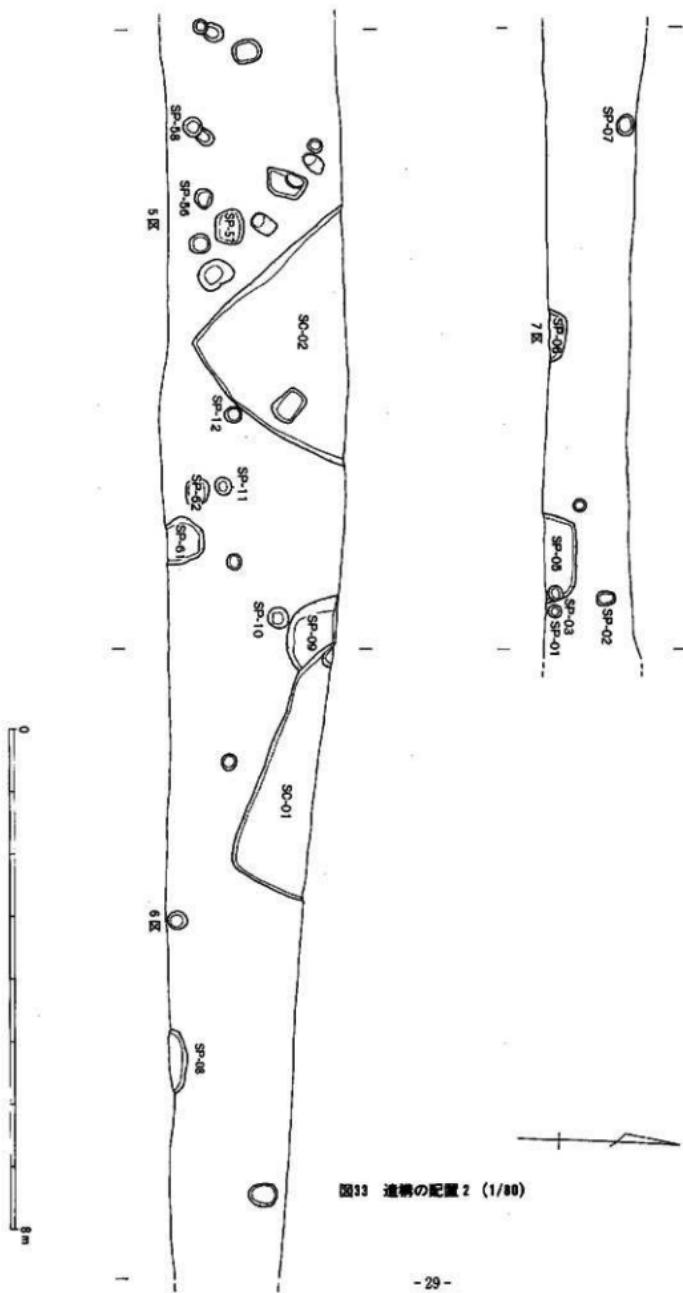


図33 造構の配置2 (1/80)

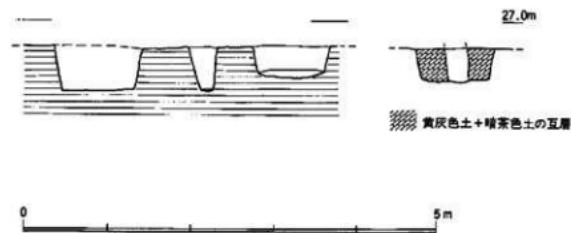
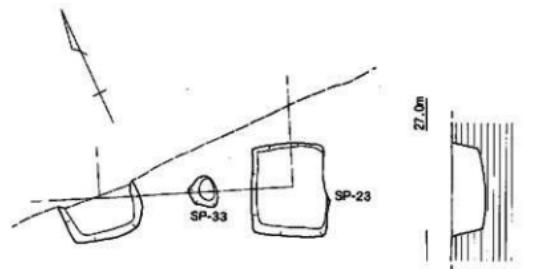
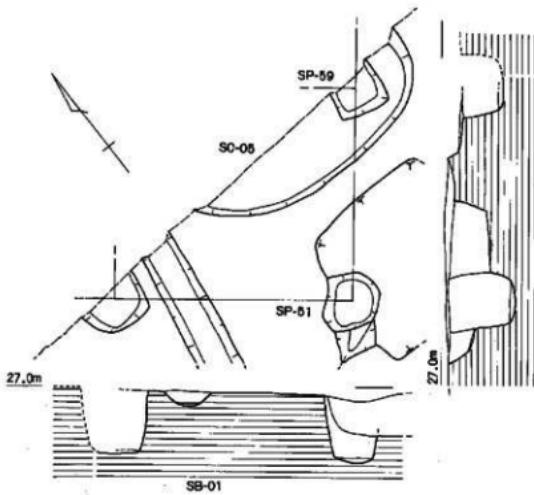


図34 据立柱建物実測図 (1/60)

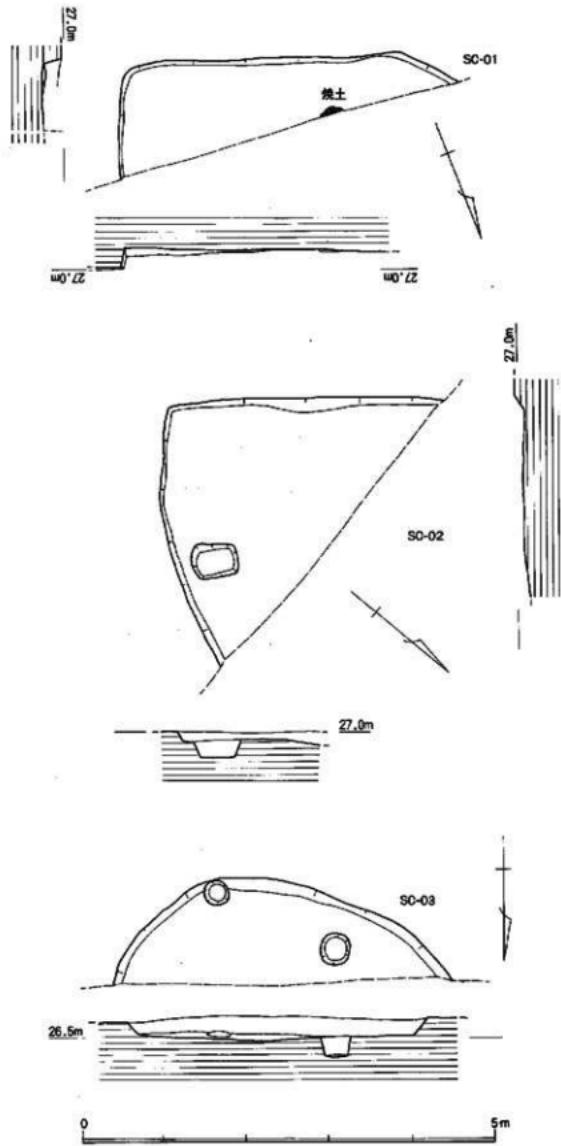


図35 住居跡実測図 (1/60)

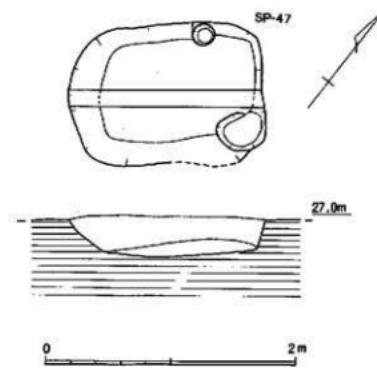
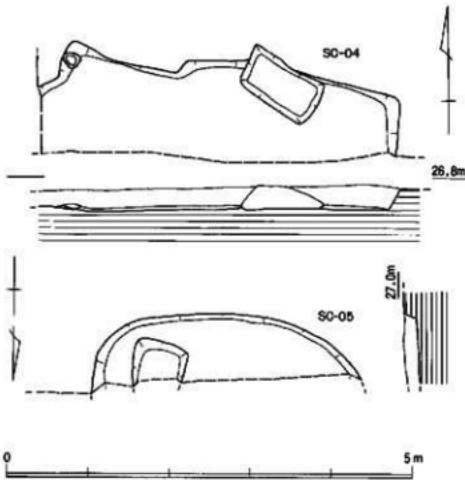


図36 住居跡・土坑実測図 (1/60, 1/40)

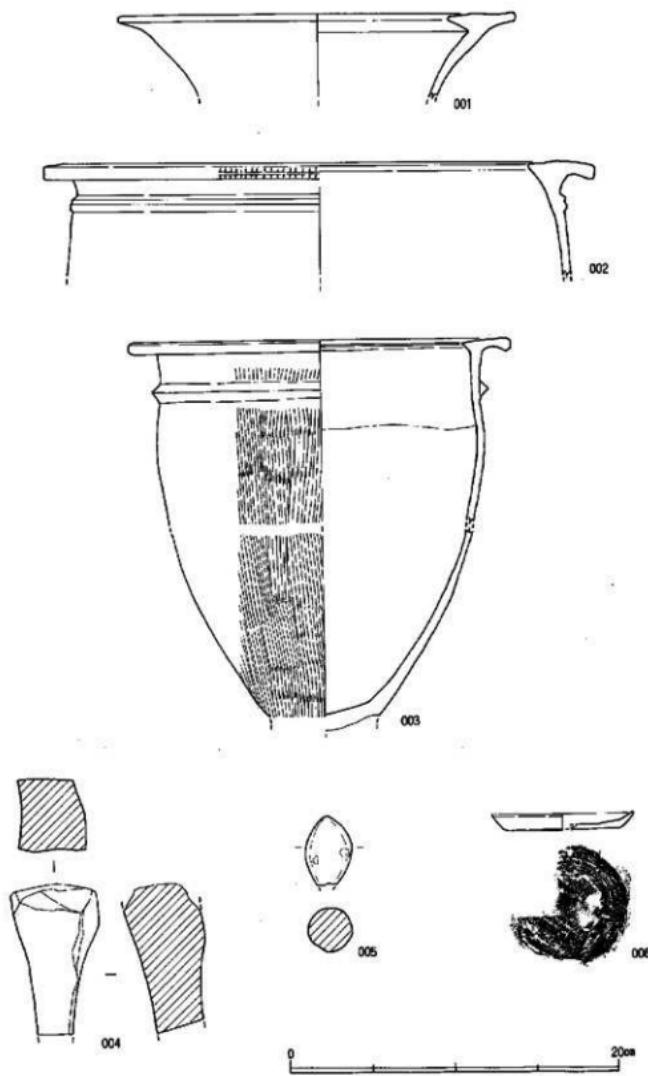


图37 出土遗物实测图 (1/3)

4. (参考資料) 浦江B遺跡第1次調査

1) 調査に至る経過

1990年から西区飯盛、金武地区の道路改良、拡張工事にともない事前の試掘調査を進めていたが、福岡市文化財分布地図による浦江B遺跡の隣接地において、遺構を確認した。遺構の広がりは大きくなないが、住居跡と見られる遺構も認められた。このため、福岡市教育委員会では保存のための緊急の調査をおこなうこととなった。調査は1991年1月14日～1991年1月15日の期間である。

2) 遺跡の位置と環境

調査地点は福岡市西区大字金武字牛久保860-1に所在し、室見川流域左岸にある。背振山山塊から延びる西山(430.1m)東麓に形成された小扇状地の扇央部に立地する。扇状地は遺跡のすぐ西にあり、南から北側に流れる亀谷川により形成されたものであるが、形成は早い時期に終わり、浸食の進んだ川との比高は10m以上となっている。現在扇状地の上面は近世に灌漑がおこなわれ、水田地帯となっている。

周辺の遺跡としては、北西約50mの扇状地端部に妙見崎古墳群がある。一部は商店、住宅となり、失われているが、石室の破壊時に多量の須恵器(提瓶を含む)、馬具などの鉄器、耳環が出土したという。また、本調査地点の東側の水田中には畦に沿って數カ所に横穴式石室の残骸や石材が分布している。耕作土中にも須恵器などの破片を採集することができる。周辺一帯が古墳時代の墳墓群であったと考えられる。

また、1991年9月14日に九州を襲った台風17号により、同じ浦江B遺跡群の東端にあたる崖が崩壊し、甕棺が露出する事態が発生した。場所は本調査地点から東約400mの位置にあり、室見川を下に見おろす扇状地扇端部にある。室見川との比高は約20mを測る。甕棺墓については二次的な破壊の恐れがあったために緊急の調査を1991年11月6日におこなった(第2次調査)。その結果、弥生時代中期後半の合口甕棺2基があり、周辺に同時期の甕棺墓群が存在すると予測された。この様に、周



辺は弥生時代から古墳時代にかけての大規模な遺跡であることが想定される。

3) 調査の経過

調査区は道路に沿った幅約5m、長さ約17mの範囲である。調査はまず、重機で表土の耕作土などを除去し、後は手作業で造構の検出、調査を進めた。杭打、水準点移動、実測、写真撮影のあと遺物を取り上げ、ふたたび重機により埋め戻し、調査を終了した。

4) 遺構

検出した造構は竪穴式住居跡1と柱穴7である。竪穴式住居は調査区西側の道路の下に延びており、全体は不明である。柱穴も柱筋が描い、掘立柱建物の一部と見られるが、これも調査区東側の水田下に延びており、明らかにする事が出来ない。

竪穴式住居跡SC01：西側半分が調査区外のために規模などは詳細に知ることが出来ない。主軸をN-30°-Eにとる。規模は略東西4.5m、略南北5.0m、深さ15cmを測る。床面東寄りに椭円形の浅い掘り方を検出した。その規模は長さ1.1m、幅0.7m、深さ5cmを測る。焼土と炭化物があり、炉跡と見られた。この他に床面に柱穴などは未検出であった。住居の覆土は腐植を多く含む土壤であり、北側隅部で土師器片が集中して出土した。

5) 遺物

SC01からは土師器と須恵器、甕片が出土した。土師器には椀（1）、甕（2、3）がある。椀は口径約13.5cmであり、やや深く、内面ミガキ、外面指押さえナデである。甕は小型（2）と大型（3）がある。2は外面ハケ、内面箆削りである。3は外面が粗いハケ、内面が箆削りである。須恵器甕は胴部片で外面格子、内面同心円タタキであった。

住居跡以外の遺物として縄文時代と見られる石器片、中世の磁器片が造構検出段階に出土した。何れも図化できるものはないが、周辺に該期の何らかの遺跡がある可能性を示している。



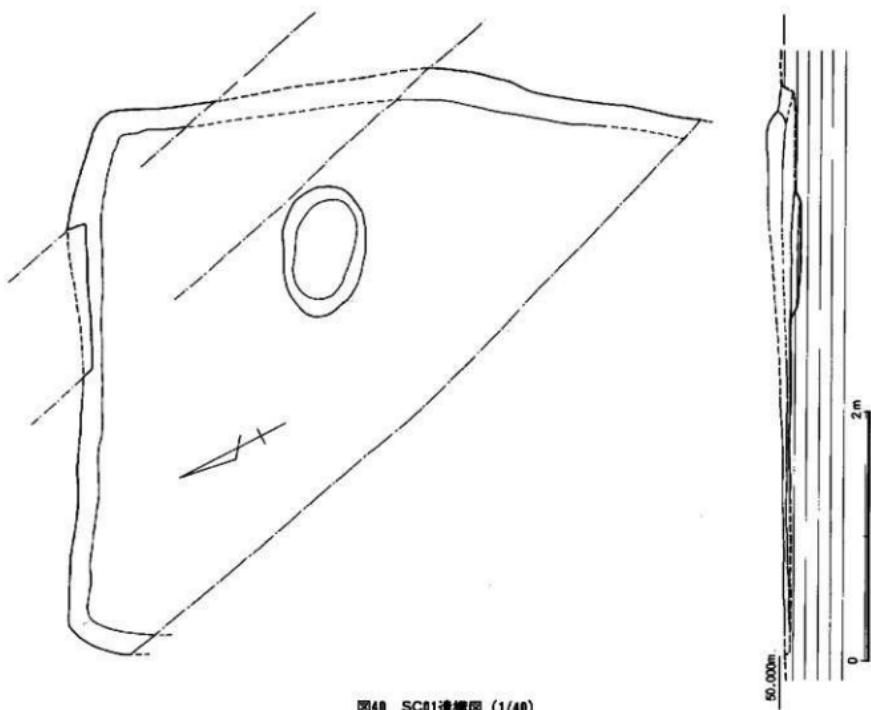


図40 SC81遺構図 (1/40)

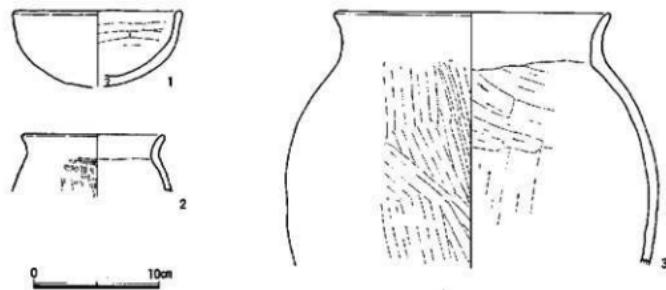


図41 SC81出土遺物 (1/4)

第5章 まとめ

1) はじめに

今回の四箇古川遺跡第1次調査ならびに四箇船石遺跡群第4・6次調査地点は、道路幅という限られた範囲での調査であった。しかし、早良平野南部の代表的集落の調査であり、調査における成果は必ずしも多いと言えないが、既調査と合わせて見ると、弥生時代の集落景観をある程度描くことが可能となってきた。ここではその点を略述しまとめとしたい。

2) 出土遺物について

四箇船石遺跡では、弥生時代中期後半の遺物が多く出土した。ここでは詳細な検討は出来ないが、その中で4次調査の鉄器と剥片石器についてふれておきたい。鉄器は3点の鉄器が出土した。SD21出土の板状鉄器は、造構の切り合いからみて中期中葉から後葉に位置づけられる。SD09出土の鉄鎌と鉄斧は何れも中期後葉～末葉のものである。鉄鎌はこの時期の例としては数少なく、保存状態も良く貴重である。鉄鎌はA1型であり、川越哲志氏の研究によるとこの型式は国産品ではなく、舶載品の可能性が指摘されている。また、剥片石器類は表1に示したように198点が出土した。この中には少數の縄文時代後期から弥生前期のものも含まれているが、該期では比較的一括性の高い資料である。本地域ではこの弥生時代中期後半以降、剥片石器技術は失われる。この資料の特徴は、1) 石材の中で古銅輝石安山岩が激減すること、2) 剥離技術の後退、3) 石器組成の減少などがある。これらは北部九州の縄文時代以来の石器技術の変遷と、それらに変わる鉄器の普及に関連したものといえる。なお、同時期の福岡平野中心部の比恵、那珂遺跡群などではこうした剥片石器群は確認できない。これは鉄器化への地域的な較差の存在を見るより、集落における複合的な生産活動のあり方の差を示していると考えられる。こうした弥生時代中期後半の剥片石器技術についてはいずれ別に記したい。

器種	石 器					その他の			
石 材	石鎌	石鎌未	削器	石鋸	使剥片	剥片	碎片	石核	計
黒 輝 石	1	2	-	1	8	52	101	28(1)	194
古銅 輝 石	1	-	2	-	-	1	-	-	4
計	2	2	2	1	8	53	101	28(1)	198

表1、四箇船石遺跡4次調査区出土剥片石器一覧（石核の（）は原石を示す）

3) 四箇船石遺跡における弥生時代集落の変遷

四箇古川遺跡1次調査では中世末に開削、埋没した河川（用水路）が現れ、この時期に集落の立地する微高地の西側低地の開発がおこなわれたと見られた。弥生時代の造構、遺物の分布はない。集落の西の限界を示している。微高地の東側は四箇船石遺跡1・6次調査において河川跡と見られる段が確認されており、これによって微高地は東西150m前後の幅があると判明した。

四箇船石遺跡4・6次調査では、主に弥生時代中期後葉の竪穴式住居跡、掘立柱建物、溝、土壙などが検出された。この調査地区は1989～1990年におこなわれた県営圃場整備事業にともなう1～3次調査の北側に隣接している（図43）。4次調査地区的南側には11号排水路VIII区、6次調査地区的南側には11号排水路VII区がある。この範囲を見ると、楕円形、長方形住居が多く、円形住居は少ない。住居は4次調査3・4区付近と6次調査1～6区付近の二群に集中している。この二つの範囲

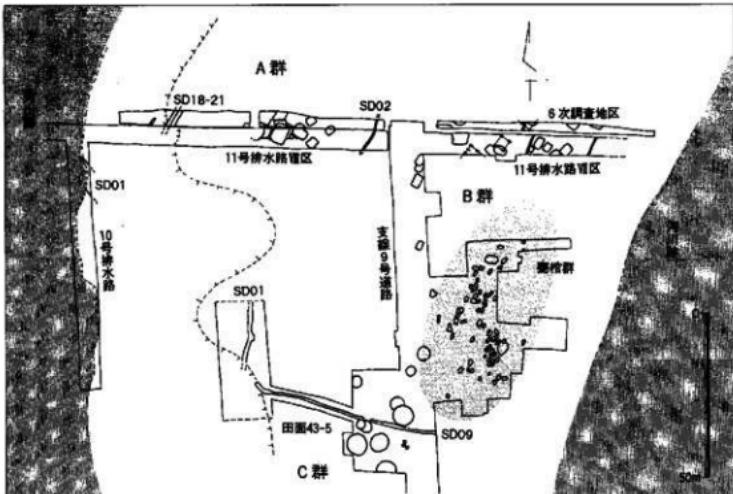


図42 四箇船石遺跡弥生時代主要遺構配置図(1/1,500)

について、仮に前者をA群、後者をB群とする。A群は狭い範囲に集中し、切り合いが著しい。B群は小型の住居が多く、比較的分散している。掘立柱建物は確認できるものがB群に4棟ある。溝は時期不明のものを含めると6条ある。何れの溝も微高地の延びる方向に一致している。このうち4次調査SD02は微高地の中央にあり、A・B群を区分しているようである。また、4次調査SD18は、小規模ながらV字溝であり、西側の微高地端部にある。集落の区画をなすようにみえる。同様に西側の微高地端部を巡る溝として田面43-5のSD01や10号排水路SD01がある。埋葬遺構は調査区内で検出されなかったが、6次調査地区の南約30mの支線9号道路地区において、同時期の甕棺、土壙墓群がある。このようにこの時期の遺構は微高地上に、一定の企画性をもち分布している。

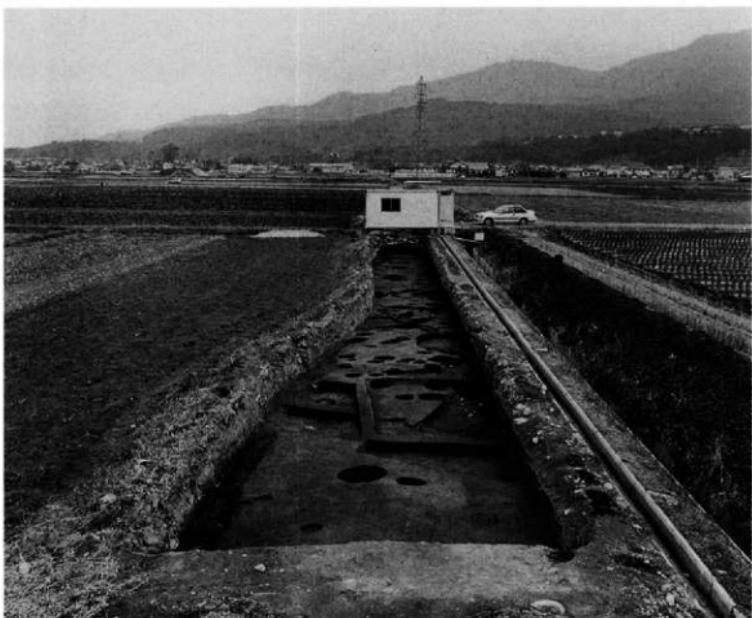
なお、A・B群は、住居跡内からの出土土器からみて弥生時代中期後葉～末葉を下限とする。また、集落としての初現は柱穴内出土遺物の中に中期前半に遡るものがあり、この時期と見られる。

ところで、A・B群から南へ70m離れた支線9号道路地区から田面43-5地区付近に円形住居群や溝が検出されている。これらは弥生時代前期中頃から中期初頭に位置付けられるものである。これをC群とすると、四箇船石遺跡の住居の配置はC群→A・B群という、集落の中心が北に移動する動きがあったと考えられる。また、住居の移動後、C群の東側一帯は墓地として使用されている。これが一連の集落の継続にともなうものはなお断定できないが、前期段階に集落であった土地を墓地として利用するのは、板付遺跡南台地や比恵遺跡でも知られている。こうした土地利用において共通性を示す点からも、四箇船石遺跡が周辺でも継続性の高い集落であったと考えられる。

弥生時代中期末葉以降の四箇船石遺跡の集落については不明である。さらに未調査の微高地北側に移動するのか、あるいは集落全体が移動したものかは今後の調査が必要である。

- (1) 川越哲志1993「弥生時代の鉄器研究」雄山閣
 - (2) かつて、四箇船石遺跡A・B群における集落の成立を南300mにある岩本遺跡の集落の廃絶と関連づけ、新たな集落の形成と見たが、この点は今回示した案と合わせて検討課題としたい。
- 吉留秀敏1993「岩本遺跡－岩本遺跡第3次調査報告－」福岡市教育委員会

し か ふないし
四箇船石 1
図 版



四箇船石4次調査区近景（西から）



四箇船石 4 次調査区全景（西から）



1. 1~4区塊鋼全景(東から)



2. 4~7区塊鋼全景(東から)



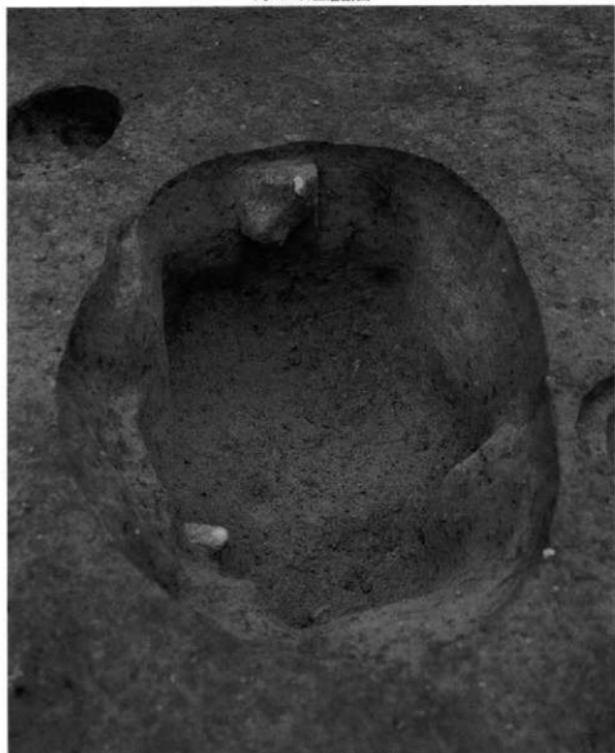
1. SK03土層断面（北から）



2. SK04土層断面（北から）



1. SK05土層断面



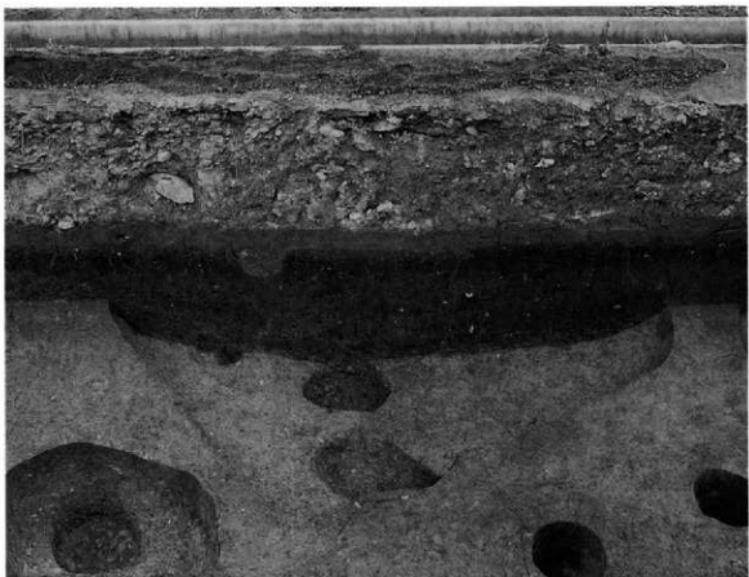
2. SK03発掘状況（東から）



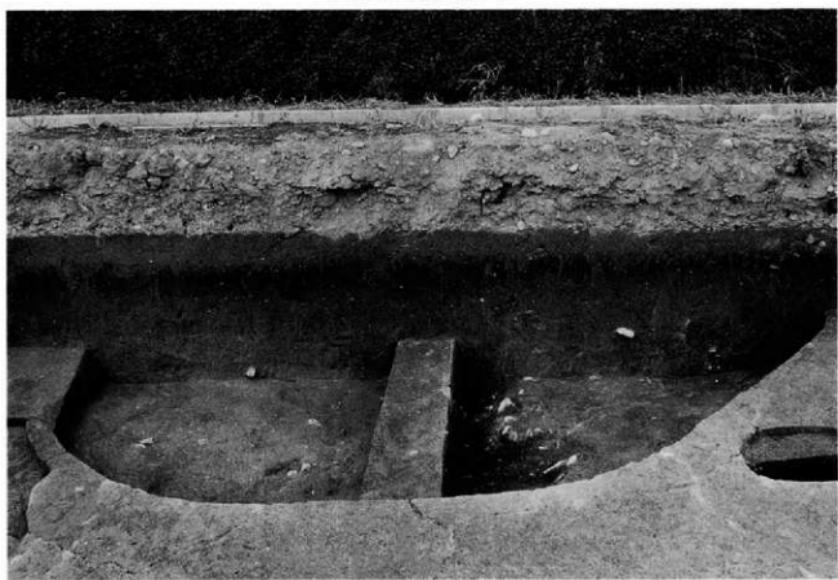
1. SK85完掘状況（東から）



2. SC86土層断面（北から）



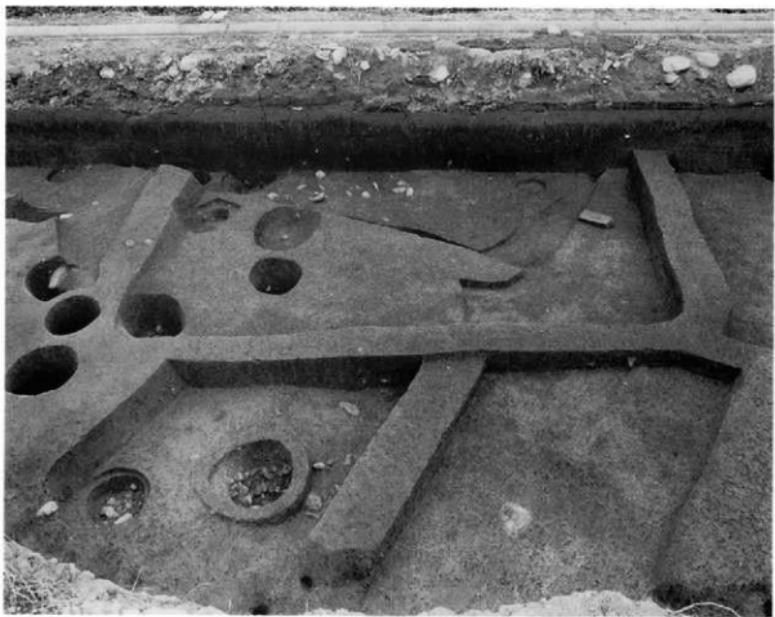
1. SC08完掘状況（西から）



2. SC08完掘状況（西から）



1. SC88発掘状況（北から）



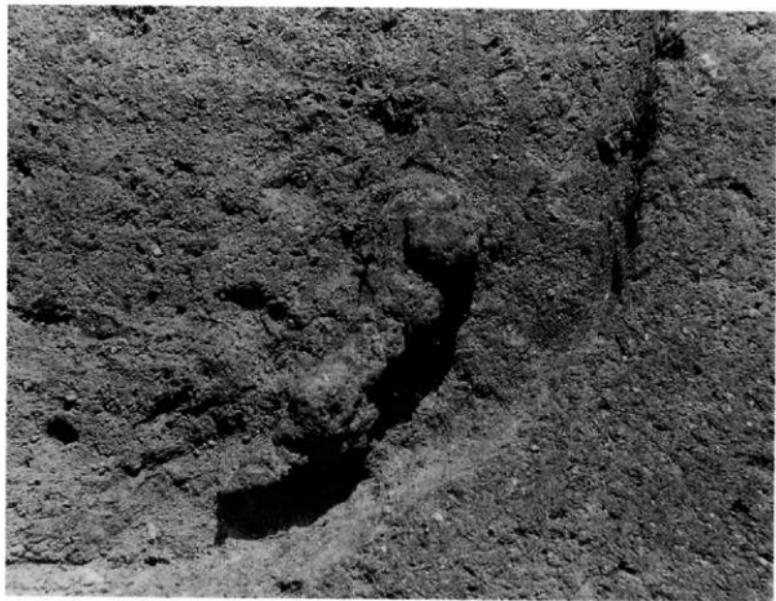
2. SC09～SC12調査状況（北から）



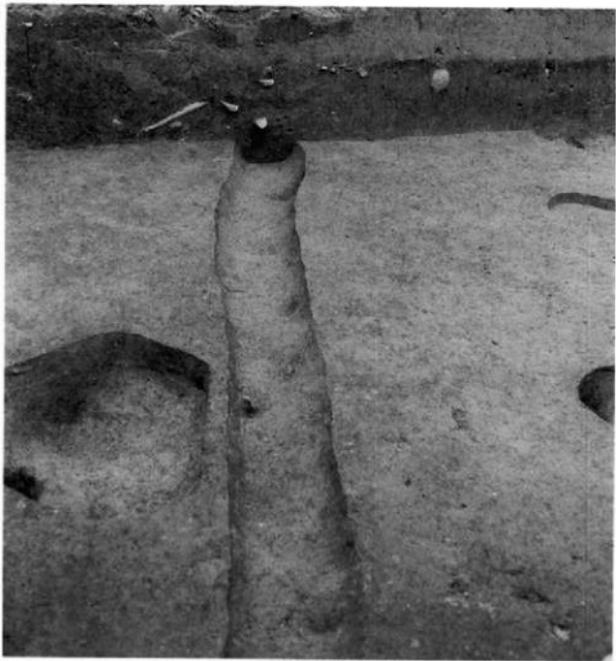
1. SC09～SC11完掘状況（西から）



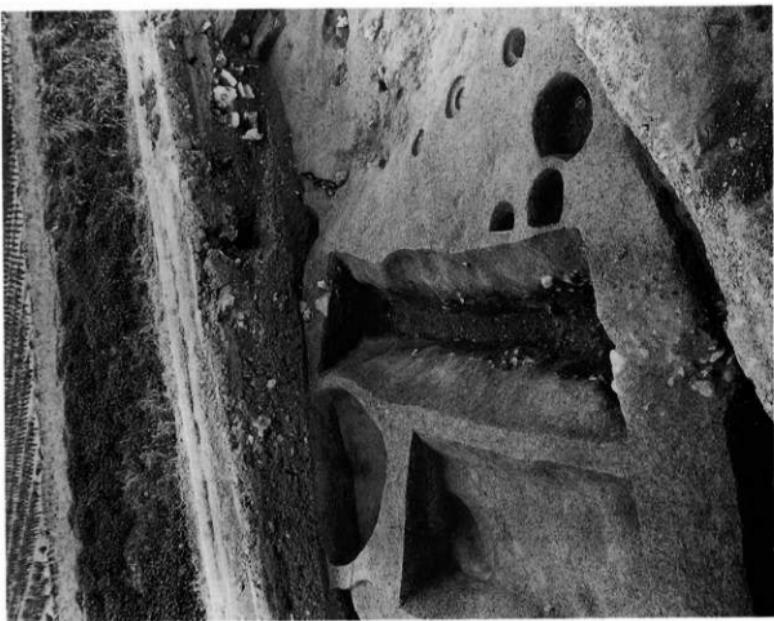
2. SC09～SC12完掘状況



1. SC02鉄器出土状況



2. SD02発掘状況（北から）



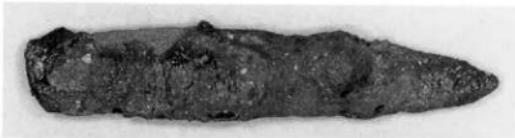
1. SD11・SD21完結状況(北から)



2. SD11・SD21完結状況(南から)



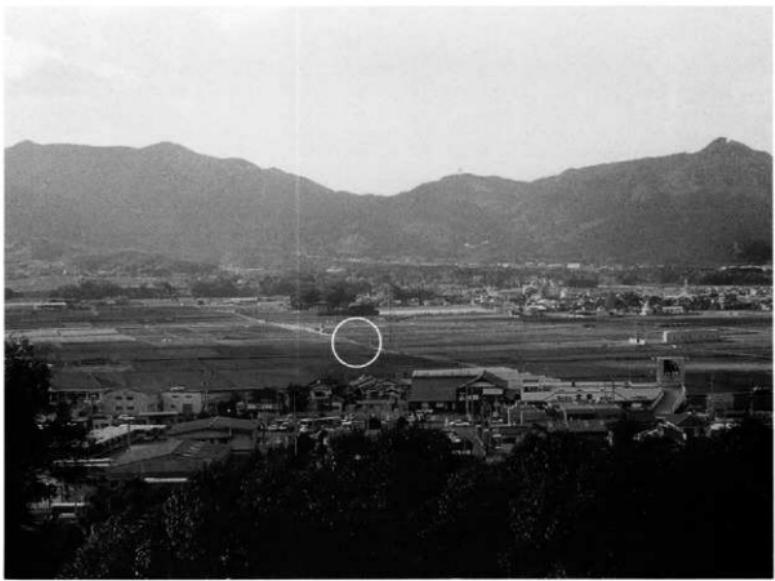
1. SP08出土鐵器（鉗）



2. SP08出土鐵器（劍）



3. SD21出土遺物（斧）



1. 調査区遠景（東より）



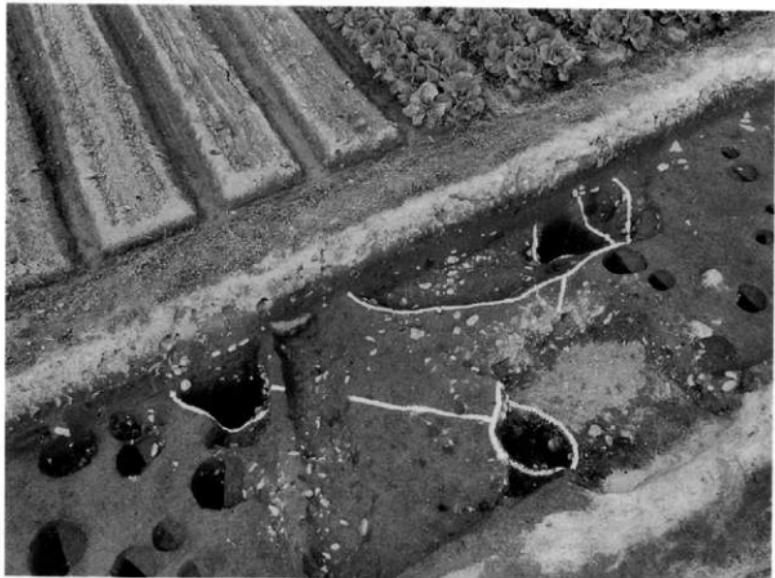
2. 西調査区全景（東より）



東調査区全景（西より）



西調査区遭構検出状況（東より）



1. 摺立柱建物 (SE01) 検出状況 (南より)



2. 土坑 (SP47) 検出状況 (南より)



1. 挿立柱建物（SB02）柱穴土層（南より）



2. 挿立柱建物（SB02）近景（南より）



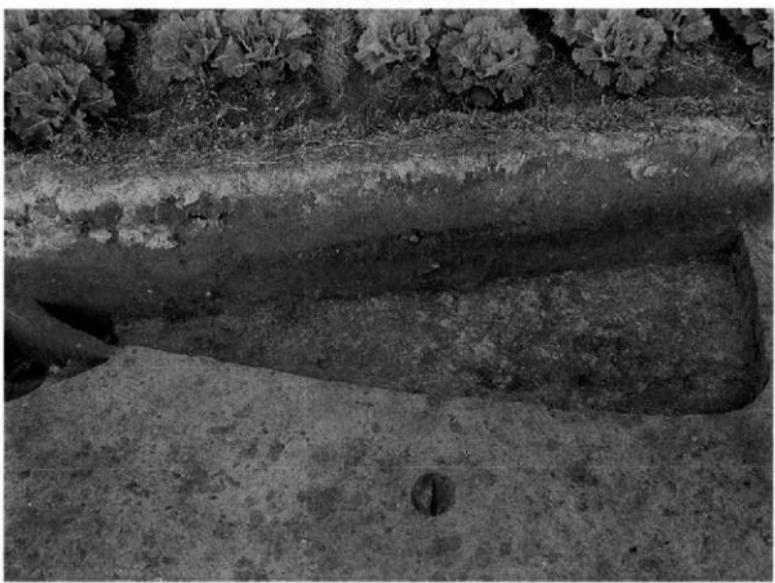
1. 住居跡 (SC03) 近景 (南より)



2. 住居跡 (SC05) 近景 (南より)



1. 住居跡 (SC01) 発掘風景 (南より)



2. 住居跡 (SC01) 近景 (南より)



1. 浦江B遺跡全景（東より）



2. 道構検出状態（南より）

四箇船石 1

—東入部地内道路2・3発掘調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第422集

1995年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 秀巧社印刷株式会社

福岡市南区向野2丁目13-29
